325
286

325-286

新約物語

野邊地天馬著

社版出未了

大正
7.5.16
内交

南薰造挿畫

平井武雄装幀

はしがき

新約聖書は世界で一番名高い、一番ふしぎな書物です、それを解りやすく書いたのは、この「新約物語」であります。うむナル程これは面白い、斯な不思議なことがあつたか、夫は斯いふ意味だつたかと、お解り下されば滿足で御坐います。

大正七年三月イースターの日

天馬

おことわり

新約聖書を平易に書きくづす事は至難のことで、私ごとき者の書いた物が果して成功せるや否は、大方の御批評を仰がなければ解りません。

本書は現代の少年少女を新約の氣分に觸れしめ、その事蹟と精神の大要とを理解せしめんと努めたものであります。

さればの叙述の形式はお嘶風に面白く餘韻のあるものとなし、遠いユダヤの風土が心に描かれ、人物の活動、事件の推移が目の當り見る如く感じさせ度いと努めました。

教理上の議論のあるところは何れにも偏しない爲に、批判的態度を避け、聖書の字句に據りました。

大人の觀るところと、兒童の觀るところと違ふので、記事の撰擇にも苦心した積りで御坐います、排列の順序は大抵年代的にいたしました。

著者

目次

	頁
星	二
劔	一六
淋しいナザレ	二二
都上り	二九
河畔	三七
曠野	四七
蠹の水	五三
二つの誕生日	六一

目次

井戸……六七
大漁……七五
起きよ……八三
屋根の穴……八八
日曜日……九八
十二人……一〇四
鳥と花……一〇九
大あらし……一一七
ふしぎなお父様……一二六
一人娘……一三六

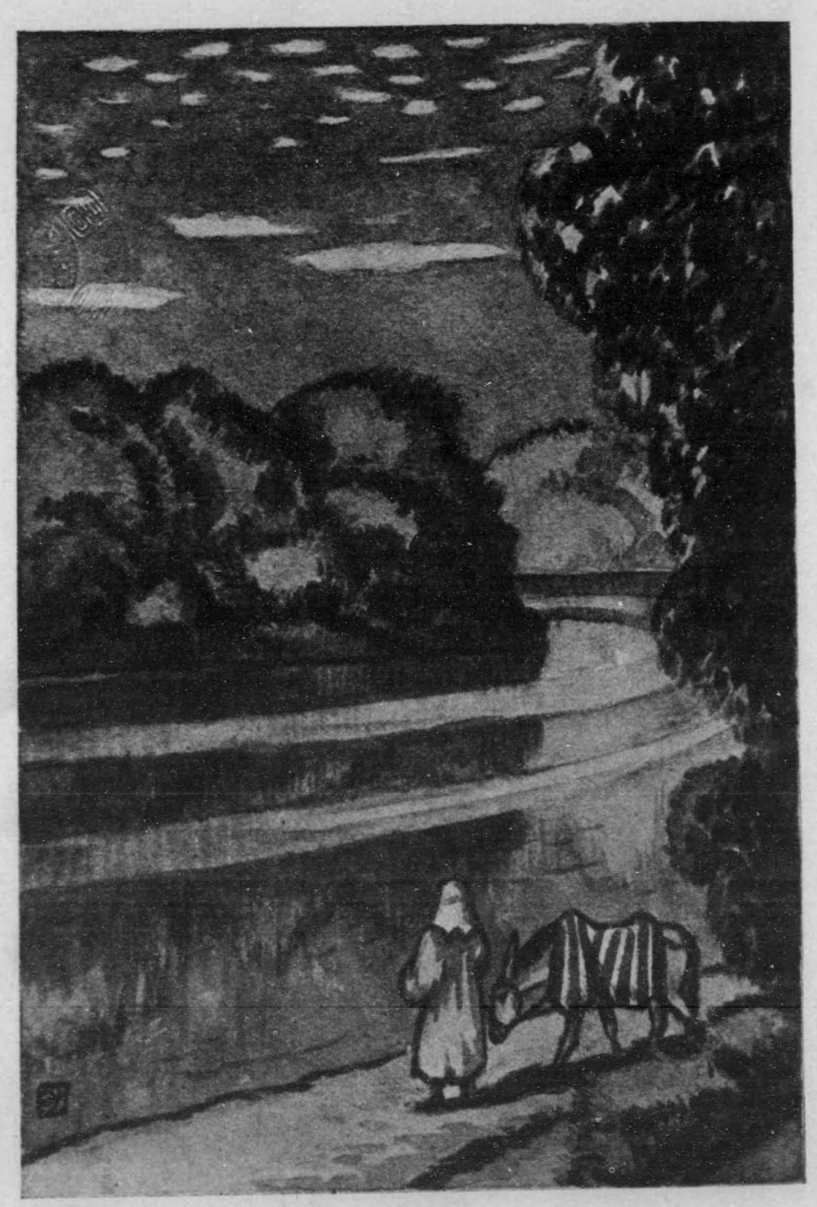
ふしぎなお辨當……一四五
夕食の後……一五五
人違か本人か……一六三
山の上、山の下……一七一
隣人……一八二
憐な富豪……一九〇
お話三つ……一九五
針の穴……二一二
桑の樹……二二一
ペタニヤの村……二三四

目次

心の香……二四〇
主の用……二四六
お説教二つ……二五三
問題二つ……二六〇
客房……二六五
淋しい御馳走……二七三
拾圓のお金……二七八
恐しい籤……二八四
月の森……二八九
盗人の如く……二九六

裁判……三〇六
カルバリー……三一五
イースター……三二七
左様なら……三三二
荆ある鞭……三三六
ペテロの案内……三四七
羅馬へ……三五五
パトモスの島……三六三

目次終



日本製版株式會社

挿畫

博士の出發
エジプトへ
曠野
ヨルダン河
ヤイロの娘
隣人
一疋の羊
イースター
パウロの蜘

新約物語

星

「夕映こやけ、あした天氣になァれ」と遊んでゐた子供たちの聲もごこかに消えて、四邊が暗くなりました、御用達から歸つた太郎、ビックリして、戸口に立つたまゝ

「やァ、お祖父さん早く」

「太郎や、どうした〳〵怪我でもしたかい」

「否、左樣ちやないの、何だか光るものが……」

「ひかるものッ、そんなら拾つておいで、お金かも知れない」

「いゝえ、落ちてるんぢやないの、上の方に」

「跳ねあがつて取ればいゝよ」

お祖父さんは仲々慾張つてゐます。何の事だかわかりませんから兎も角、出て見ますと、ナル程驚いた、これまで見た事のない大きな星が西方の空に出てゐます。

「あゝ、これは不思議な星だ……」

「さうでせう、お祖父さん」

「はて、世の中に變つた事でも起らなけれやよいが」

「變つた事ッて」

「左樣さ、昔から饑饉や戰爭の起る前表にこんな星が出るといふこ

こだ」

その中にお隣のお爺さんも出て來る

「ナル程そんなことがありました、私等の若い時、戰爭のあつた年に大きな箒星が出ました、しかし偉い人が生れる時も出るといふ傳說です」

若い人達は熱心に聽いてゐます、そして一人が

「とにかく森の先生に聽いたら解るでせう」

と言ひだします

「うむ、さうだ〳〵夫がよい」

一同でゾロ〳〵でかけました、先生といふのは森の中に住んでゐる

天文のことを調べる博士でありました。今しも西に輝く星を見つめながら、しきりに何か考へております、すると遽かに

「あらァ、先生樣がゐるぞ」

と言ふ聲がする、何かと見れば村の人々が押しよせてまゐります、博士は

「やァ如何したのだ……」

「實はあの星のことですよ、あれはドーしたんでせう、善いのでせうか悪いのでせうか」

「ふむ、私も今かうして眺てゐるが、あれは箒星ぢやない、そして芽出度い星だ……西方の國に偉い王樣がお生れなされたに違ひ

ない」

「へえー、さうですか夫はドウいふ譯で」

「それはね、天の神樣が世界の人をお救ひ下さるために、偉い人をお降しになるといふ事が、古い聖書といふ御本に書いてある、あの星は其徴に違ひない」

一同は安心しました。

「さうで御坐いますか、難有存じます、大きにお邪魔いたしました」

そしてゾロ〳〵歸つてゆきました、二三日經つて博士はその星をたよりに、自分の考へた事を見きわめやうと思ひたちました。

「ハア先生樣、どこへいらつしやりますだ」

博士の旅姿をみて叫びだしたのは村の人々です。

「おゝ、私はこれから王樣を拜みに往きます、留守を宜しく賴みますぞ」

「はあ、左樣ですか、それは結構で御坐います、往かつしやいませ」

博士を乘せた駱駝はノソリ〳〵と野越え、山越え、澤こえて西へ〳〵星の輝く國へと進みました、するとひとりの旅人が横の方から駱駝に乘つて參ります、道づれになつてみると、之も矢張り星をめあてにゆくといふのです、それではと一緒に、途々樂しく語りながら往きました。

ところが又も別の方からやつて來る旅人が御坐います、この人も星

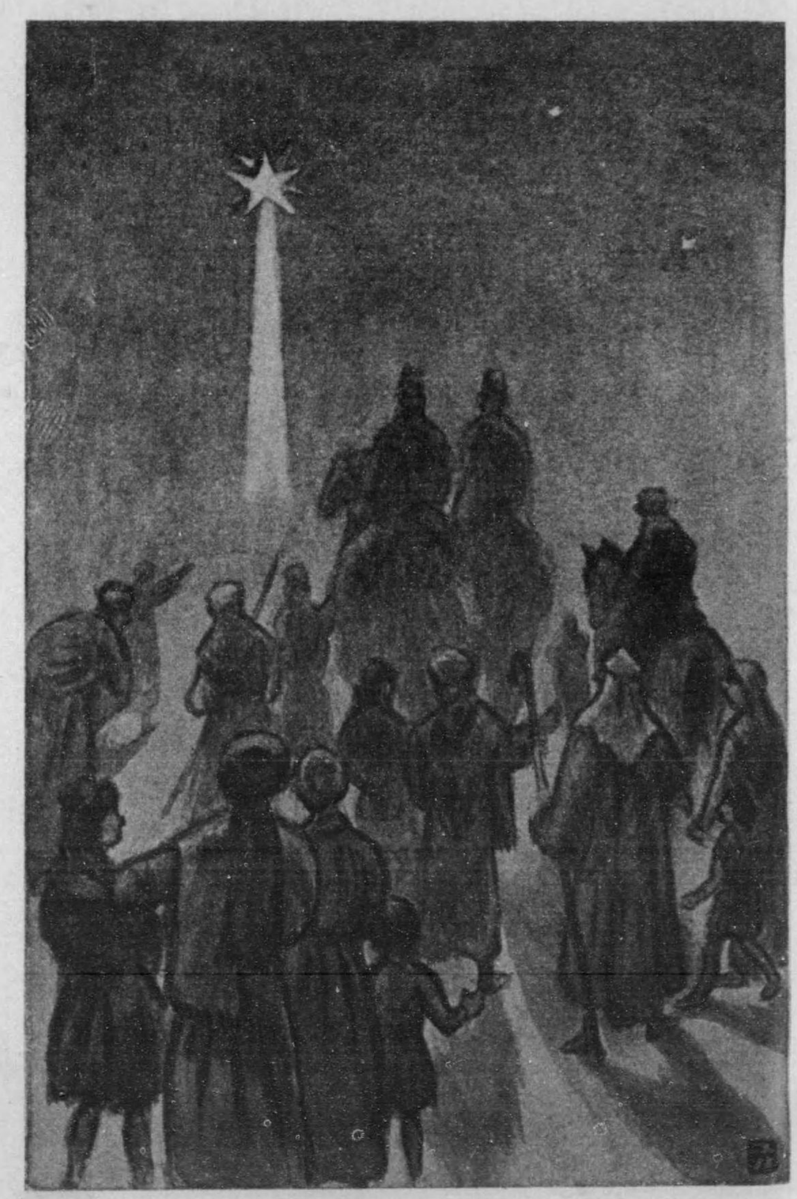
をめざして參つたのだといふ、それで三人はどんなに心強く思つたでせう、三人が三人まで同じ事を考へることは、キツト神樣のお啓示に違ひないと勇みたちました。

幾十日かの後、漸くユダヤの國に着きました、此處は亞細亞の西端、むかしカナンの國イスラエルの國などといつた所です。

國境のヨルダン川をわたり、橄欖山の裾をまわると首府のエルサレムです、ダマスコの門といふのがあります、三人は番兵に

「一寸おたづね申します、私共は東の方から參りましたが、こんどお生れになつた王樣は何所においでになります」

「なにッ、此度うまれた王樣……わからないなあ、此國の王樣は



田中製版所印行

ヘロデといつて御年六十九にゐらせられる」
「いえ其お方でなく、此度お生れになつた王様……」
「知らん、そんな者は知らん」
仕方なく門を通つて中にはいりました、どこかの小父さんが來る博士は
「モシ一寸おたづね致しますが、此度お生れになつた王様はどちらに……」
「エ、なんですつて」
「はァ、私共は遠い國からまゐりましたが、この國に偉い王様がお生れになつたでせう」

「知りませんねえ」

「へえ……」

薩張り何のことか埒があきません、其の中に此事が都の評判になり王様の耳に入りました、王様はこれには何か仔細があるに相違ないと思召し、その博士たちをお召しになりました。三人は

「私共は東の方から不思議な星を見ましたので、確に此國に偉い王様がおうまれなされたに違ひないと思つて參りました」

と事の概要をお話いたしました、王様は心の中で「これは大變だ、もしほんとだつたら私の位が奪られて了う……」と心配いたしました、そこで早速學者たちをお集めになり、三人の博士の言ふた

ことを話して

「一體その様なことが聖書にあるか、王様の生れるといふのは何所だ」

とお訊きになりました、學者達は

「ハイ、それは舊約聖書にベツレヘムだと御坐います、私どもは未だ何の徵も話も聞きません、學問のない牧羊夫どもは天の使を見たの何のといふ話はありますが、そんな事は取立てるべきものでも御坐いません」

王様はモー一度、三人の博士にお會になり

「それはベツレヘムといふ事だ、此處から二里半ほど南にある村だ、

若し新らしい王様が知れたなら歸途に敎へてもらひたい、私も拜みにゆきますから」

その實、拜むは愚か殺してしまおうと考へたのです、王様にだまされるとも知らず三人は疲れも忘れ、日の暮れたのも構はずに南へと向ひました、ところが大きな星はまたも見えて三人の先になつて動きます。

「オヤ、星が歩いてゐますぜ」

「あゝ、さうだ……私達の案内をするのでせう」

三人は長い間の旅も、モーぢきおしまひになるかと思へば、嬉しくてたまりません。どんなお家でせう立派なお金持の家か、ベツレヘ

ムの一番名高い人の家かと、いろ〳〵考へながら村に着きました。

「もし〳〵、一寸伺ひますが、こんどお生れになつた王様のお家は何處ですか」

「知りませんね」

「オヤ、此地でもエルサレムの眞似をしてゐる」

思はず天をながめると、星はモー夙に、うしろの方にピッタリ止つてゐる。

「まア往き過ぎた、星がとまつてゐますよ」

あと戻りして、星のとまつてゐる所へ來ますと——その眞下の家——貧乏らしい穢い家に、オギャーオギャアーと泣き聲がいたします。

「ほうら、此家でせう、此家！」

「だつて、斯樣な貧乏な……」

「さうですね、ですが物はためし、訊いてみませう」

戸を開けて見れば玉のやうな赤ちやん、むさくるしい家の粗末な着物に包つてはゐますが、ごこなく神々しい。

三人は大よろこび、これだ、この方に違ひないと思ひましたから嬉し涙にくれて伏し拜みました。

それから各自用意のお土産を取りだして獻上げました、一人は澤山の黄金、一人は乳香といふ香料、一人は沒藥といふ香ひ膏で、いづれも尊い物、王樣のお用ひになる品でした。そして三人は

「私共はこれで滿足いたしました、御生育になるのを待ちまする、してお名前は……、あゝ、エス樣と仰せになりますか」

安心しながら宿屋について休みますと、夢を見ました、その夢は三人ともおなじで

「ヘロデへ歸るな」

といふお聲を聽きました、深い理由は解りませんが、これも神樣のお啓示と思ひましたから、翌朝早くベツレヘムをたつて、他の途から東方に去りました、これは今から一千九百二十年ばかり前のお話で御坐います。

劒

幾日經つても、歸つて來るはづの博士が戻つてまゐりません、毎日待つてゐたヘロデ王は氣が揉めて仕樣がありませんから、ベツレヘムへ使者をだして博士を探させると、モー夙に居ませんでした、王樣は怒つて

「なんだ、不埒な者共である、あれほど堅く賴んだのに欺したな、……では宜しい此上はベツレヘムを……」

と何を考へたものか、すぐに大將をお召しになりました。

「おゝ、少々卿に賴み度いことがある、早速だが兵士を三百ばかり率つれて、ベツヘレムを圍んで貰ひたい」

大將は驚いた

「へえ、王樣、謀反人でも起りまして御坐いますか」

「おゝ」

「その敵は」

「赤坊だ、二歳以下の哺乳兒だ、その他の者は殺すに及ばない」

「へえー、赤坊が謀反をいたしまして御坐いますか」

「そうだ、それに違ひはない、夫れ急げ!!」

大將は何のことやら解りません、けれども王樣の命令、三四百人の

兵隊をつれてベツレヘムに向ひました、そして赤坊ど見たら殺してしまう積りです。

こちらはベツレヘムの邑、いつもど同じ様に美しい日が照つてゐます、赤坊を背負つた子守は幾人も日向に出て

ねんねん合歡の　木の上で
雀が坊やを　よんでゐる……

ど、やさしい聲で歌つてゐます。フト見れば大勢の兵隊が嚴めしくも美しい服裝でやつて來る、子守達は珍らしげに眺め入つた、間もなく兵士は四方にパラ、パラッと散るよど見る間に、自分たちの背中にある赤坊を奪ひにかゝります。

「あれーッ」

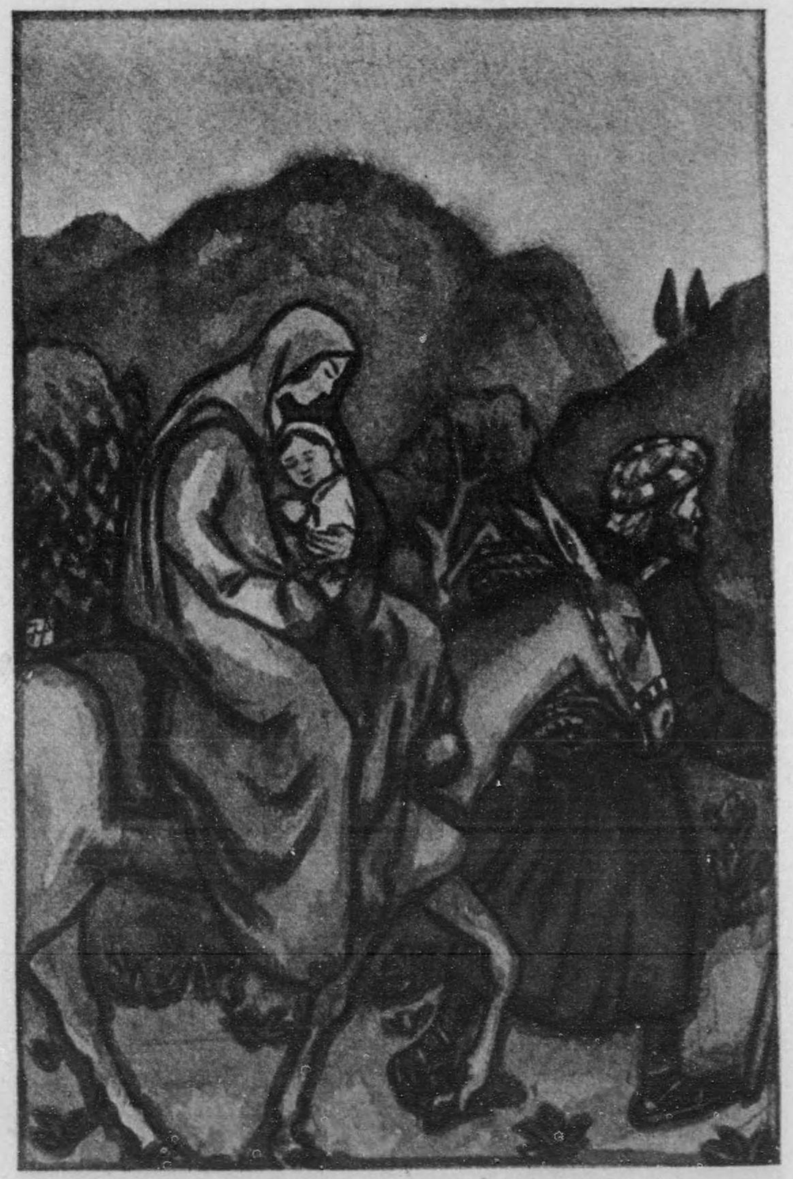
ど、わめきながら逃げやうとする、兵士は早くも赤坊を掴むで刺し殺しました。

その外、母親の懷にだかれてゐるもの、搖籃に眠つてゐたもの、赤坊ごいふ赤坊はのこらず、血まみれになつてしまひました。

泣きさけぶ聲、怒りのゝしる聲、氣が狂つて驅けまわる叫びが、邑中にひゞいて、何ども物悽う御坐いました。

大將はその旨を王樣に申しあげました、王樣は

「おゝ、それは御苦勞だつた、それで私も安心した、モー私の位を奪る者は失くなつた、褒美をつかはさう、兵隊共に酒を飲ませろ」



と言つて喜びました、なんと鬼の様な王様ではありませんか。ヘロデ王は二歳より下の赤坊を殺したから、エス様も死んで了つたに違ひない、不意打をしたのだから逃げる間もなかつたぞろうと思ひました。

けれども不思議なことにエス様は、此時、モー居らつしやらなかつたのです。それは斯うでした——

或る夜半のこと、天の使者がヨセフに

「ヨセフよ、ヨセフよ、大變なことになるよ、ヘロデ王は赤坊を殺さうとしてゐる、早く此邑をお逃げなさい、早く早くエジプトがよい」

これは夢でした、けれどもヨセフは神様のお告示とおもひましたから、飛び起きて、遽かに仕度をし、一頭の驢馬にエス様を抱いたマリヤを乗せ、人目につかぬ中に邑を去りました。

そしてあの惨たらしい叫喚のする頃は、早や數里離れた山地を辿つておりました。

それからヨセフ達は三月の間エジプトに居ましたが、またも天の使者の知らせにより、恐ろしいヘロデ王の死んだことが解りましたから、再びユダヤに戻り、もと住んでゐたガリラヤのナザレといふ邑に落きました。

淋しいナザレ

ナザレは山地にあるさゝやかな邑で、四邊は禿山や、野原に圍まれたところです、都のやうな美しい家もなければ、綺麗な人も居りません。粗末な着物をきて、不味い物をたべてゐる人達のおる田舍町でした。

ヨセフは以前から、このナザレで木匠をしてゐましたが、うまれた故郷がベツレヘムだつたので、戸籍しらべのあつた時、奥さんになる約束のマリヤといふ婦人をつれてベツレヘムに往きました。

その時、マリヤは神樣のお力によつてエス樣をお胎にやどしておりました。

この二人は、世にもめづらしいほど聖い義しい人達で、その素情もまことに立派な人、ダビテといふ偉い王樣の後裔で、世が世ならば立派な御殿におるべき人でした。

けれども、その頃ユダヤは衰へ、その上、羅馬の屬國になつてゐましたから、見る影もなく零落て、貧乏な木匠になつてゐたのです。

さてナザレからベツレヘムに着きますと、モーどこもかしこも、戸籍しらべを受けに戻つた人で、宿屋といふ宿屋は非常な人ごみ、どこへ往つても「おあひにくさま」「お氣の毒さま」と斷はられました。

ヨセフとマリヤは仕方なく、牛や馬を寢かしたりする穴のやふな所に、泊まることになりました、その不自由なところでお産をし、生れたのはエス樣でした。

あゝ、なんと憐れな、みじめな御誕生でせう、けれどもこれが世界をお造りあそばした神樣のお獨子です、ですから天使は列を作つて空高く舞をなし、野原の上を飛んで、美しい音樂をしながら、お祝ひ申上げました。

その晩のこと、ベツレヘムの野原に大勢の牧羊者が、羊の番をしておりました。ところが遽に美しい天使があらはれて、自分達の方へまゐりますから、その神々しさに驚いて、ワナ〳〵慄え口もきけま

せん。天使は

「まあ、そんなに怖がらないで下さい、私達は嬉しくつて〳〵仕樣がない、その嬉しいことを君等にも、お知らせしに來たんです」

牧羊者は、それを聞いて稍々安心いたしました。すると

「それはね、今晩ベツレヘムに救主がお生れあそばしました、君達をお救ひ下さる方が……、往つてご覽なさい、けれどもね、立派なお金持の家でもなければ郡長さんの家でもない、あの馬小屋のやうな所です、たゞの布に包まつて馬槽の中に入れられてゐなさいます」

と知らせて、天使は空高く

「天には榮光、地には平安
人には恩澤あれ」

と繰返し〳〵歌ひながら消え去りました、牧羊者は、間もなくベツレヘムで其通りの事實を見、博士たちよりも先きにエス樣を拜むことができました。

それから半年のちのこと、ふたゝびヨセフとマリヤはナザレの邑に見えました。

淋しいナザレはこの人々を加へたことて、別に賑もしません、ヨセフはまた〳〵木匠をして、マリヤと幼兒を養ひながら、粗末な生活をつゞけました。粗末な家、みすぼらしい着物に不味い食物、一つこ

して立派なものはありません、この憐れな家にエス樣はお育ちなされたのです。

幼いエス樣が戸口のところで、往來の人を見てゐらつしやると、心なき人々はこれを指して

「やい貧乏人の兒だ、あれ禿チヨロの着物の、をかしいこと！」

「おゝ、木匠の子だ、お前も木匠になるがいゝ」

などと悪口いふたかもわかりません。

エス樣は御丈夫でした、そしてお悧巧でした、その小さい美しいお心に、早くも貧乏といふ辛い事をお覺えになりました。

「ナゼ、我家はこんなに貧乏なんだろう」

と悲しくおぼしめした事もあるでせう。

＊　＊　＊　＊

斯した事から、エス様をナザレのエスとも申上げるのです。」

都上り

「さ、また歌ひませう、元氣よく……」

と誰がいふともなく言ひだすと、今までゾロ〳〵歩いてゐた人達が聲をはりあげて

「われ山にむかひて　目をあぐ
わが扶助はいづこより　きたるや
わがたすけは　天地を
つくりたまへる　エホバより」（詩百廿一編）

こ歌ひました、頃は四月初のこと、霞たなびく春の野原をながめながら、エルサレムにのぼる人々は幾日もかゝつて往くのです。

その人達の中には男も女も爺さんもお婆さんもありますが、大抵は男です、それに子供もまぢつてゐます、これは男子が十二から上になれば是非ゆくのでありました。

「もすこし歌ひませう、今日は次の邑で泊ります、今ひとつ元氣をだして……」

われらの　たましひは
捕鳥者の　わなを
のがるゝ如くに　のがれたり

$H_2 + CH_4 + CO + 3O_2 = 2CO_2 + 3H_2O$
$H_2 + CH$

羂はやぶれて
われらは　のがれたり

斯う歌ひながら都にのぼります、これは一年一度の逾越節といふのがあるためでした。このお祝ひは往昔モーセといふ偉い人が神様のお力によつて、ユダヤの人民をエジプトから救ひだしたお芽出度いことを忘れないためでした。

この都のぼりの群集の中に、今年十二になつて、初めてナザレからエルサレムに往く少年がありました。お父様とお母様が一しよでしたから淋しいこともなく、それに物心ついて初めての旅行ですから、ドンナに嬉しかつたか解りません。

大勢の中には同じ年頃の友達もおりますから、その方へ交つて連れだつたり、知つた家の小父さんと一しよになつたり、疲れるのも知らないで元氣よく進みました。そしてエルサレムに着きましたが、都は早や何萬といふ人民が集つてゐて、大層な賑ひです。

「大變な人出ですね」

とお父樣の手に縋りながら、その少年は清々した眼を右に向け、左に向けて驚きました。

エルサレムには神樣の殿があります、昔ソロモンといふ王樣の建てたのが始まりで、それから幾度か建てなほしましたが、その時のはヘロデといふ王樣が四十一年もかゝつて建てたものでした。

ナザレの少年は小さい時からお母樣に伺つてゐましたので、神殿を見るのを樂にしておりました、それを今二つの眼で見ますから、ドンナに嬉しかつたか解りません。

「お父さま、あれなァに」

「お母樣、あそこで何をしてゐるでせう」

うるさい程いろ〳〵のことを尋ねます。人々は毎日々々お殿に往つては神樣にお祈をし、また立派な先生のお話を伺ひました。

そして丁度一週間たつて、お祝ひがおしまひになりました、人々はまたゾロ〳〵と從前來た路をもどります。

ナザレの少年も、朝、群衆と一しよに宿屋をでかけました、歌の聲

はまたもや野原に響いて聞えます。

「そのとき笑は　われらの口にみち
歌はわれらの舌にみてり
エホバかれらのために……」

――（エホバとは神様のことです）――

そして旅程はモー三日目になりました、ところが一しよに來た筈の少年は群衆の中におりません。お母様はビックリして

「オヤ、お父様の方にゐることゝ思つてゐましたに」

お父様はまた

「いや、お前と一しよだとばかし思つてゐたよ」

「さア、どこで迷兒になつたでせう……私方の子供は見えませんか」

それから群衆も騒いで、一々たづねて見ましたが、一向見あたりません。そこでお父さまとお母さまは一同にわかれて都へ引返しました。

宿屋には勿論おりません、それから若しやと思つて神殿へ往つて見ますと、立派な學者や先生方が、一人の少年を取巻いてお話してゐます、フト見れば夫が自分たちの探してゐる息子です。

「まア、お前ドーしたんだよ、隨分探したんですよ、心配して……迷兒になつたと思つてね」

「え、ドーモ濟みません、御心配をかけて、……でもね、迷兒になつたんぢやありませんよ、此所は私のお家なんですよ、天のお父様のお家なんですもの」

學者達は、この光景を見て

「いや、これは貴君方の息子さんか、ドーモ驚いて了つた、私共の知らない事までも知つてゐる、偉い悧悧なお子だ……大事にお育てなさい」

と目を丸くしながら褒めましたので、お父さまとお母さまは今までの心配はどこかに行つてしまつて、大よろこびで歸りました。

――この少年は誰だつたでせう。――

河畔

「イヤ、大變な騒ぎですよ、ヨルダンの附近は……」

「それはどんな事で……」

「なんといつてよいか解りませんが、預言者だとか、エリヤだとかいふ、大層ふしぎな人が現はれたんですつて、大勢四方八方から見に集まつてゐますの」

こんな噂が、ヨルダン河を通つてエルサレムに來る人、來る人によつて傳へられました。

ですから都の人はいづれも

「何事だろう？」

「何人だろう？」

と不思議に思ひました、氣の早い人はモー驅け出してゆきます。

なる程、ヨルダン河の畔は一ぱいの人、そのうへゾロ〳〵と集つて來ます、その人群の間に一段高く見える人は、手を擧げ、聲を絞つてお話してゐます。

「あゝ、王樣のお通御になる時、穢い路をそのまゝにしておきますか、凸凹になつたのを打擲つておきますか、そうでない、綺麗にします、高いところは低く、低いところは平にいたします。

モーまもなく王樣がおいでになります、世界をお救ひ下さる王樣がお見えになる、あなた方の心にお迎え申す準備が出來ておりますか」

凜とした聲が四邊に響きます。その人の顏は赧黑く、頭髮は茫々、兩腕を露した袖のない着物、その着物といふのは駱駝の毛皮、それに粗末な革の帶をしてゐます。

人々は、永いことユダヤの國をお救ひ下さる偉い方が出て來るだろうと思つてゐましたから、此人こそ救主ではないかと思ひました。

それですから、この噂がひろまると、我も我もと押しかけてまゐります、わけてエルサレムからは種々の人が見にまゐりました。

そして

「先生、あなたは誰ですか、救主でゐらつしやいますか」

と口々にいひました。

「否、私はそんなに偉い者ではありません」

「ではエリヤ樣ですか」

「おゝ、天から火を呼び下したエリヤのことですか、私はそんな偉い者ではない」

「さて、それでは預言者ですか」……」

「否、預言者といふ程のものでもありません、私は、救主の先驅に遣された者で、まことにつまらない者です、救主の草履取にもな

れない程の賤しい者……」

眞面目になつて、自分は卑い者、賤しい者と言ふので、みんなは驚きました。

「まア、あの先生は少しも偉らい振をしない、キツト餘程えらい人に違いない」

この不思議な人は、畫になれば袋からお辨當をだしてたべますが、それは蝗の燒いたのや、黑いパンに蜂蜜を塗つたものでした。

この人は誰でせう、それはヨハネといふ人でエス樣より丁度半年はやく生れ、三十になつた時、神樣の仰せをうけ、エス樣を世の中の人々に知らせるのでありました。

ヨハネは毎日々々、一生懸命に、お話いたしました。

「サア、皆さん準備が出來ましたか、救主のおいでになるのは、ちきですよ。意地悪る、わが儘、剛情、慾張りなどの出張つてゐるのは不可ない。

人を憎んだり、妬むだり、欺ましたりする事は凹んだ穴みたいなものだ、そんなものは不可ません。

悪い心、よくない考は殘らずうち棄てゝ神樣にお頼りなさい……」

人々は感じて、ある者は泣き、ある者は聲をあげて叫けびました。

お役人も軍人も、農夫も商人も、これまでの悪いことを廢めて、救主をお迎え申す決心になりました。そして、罪悪を洗ひ流す表徵に

ヨハネからバプテスマといふ儀式を受けました。

そのうちに半年經つて、エス樣も丁度三十におなり遊ばしましたから、いよ〳〵世の中にお現れになりました。

その日もヨハネは大勢の人々に圍まれて

「悪いことをお棄てなさい、今の内にお棄てなさい、そうでないと神樣は其人を亡してしまひます、農夫が、悪い樹を伐つて燒き棄てると同じことです」

といひ乍ら、何か遽に思ひだしたやうに話をやめて、先方のほうを見つめましたから、群衆は驚いてヨハネの舉動を見てゐます、すると

「あれ、あれ、先方をご覽なさい、あれです、あのお方です、私共が半年こゝにゐて待つてたのはあのお方です。……

あの御方こそは救主です、世界中の人の罪を背負つて、われ〳〵萬人をお救ひ下さるのはあのお方です」

群衆は機械のやうに一度に後に向き返りました、ナル程、穩和な氣高いお方がやつてゐります、ヨハネは早夢中になつて、お話はそつち退にして了ひました。

「先生、お話はどうなりました」

「え、モーどうなつても構ひません、私の使命はあのお方を、群衆にお知らせすればよいのです、あのお方を」

ヨハネは飛びだしていつて、平つたくなつてお辭儀をいたしました、

すると其方は

「ヨハネさん、私も君からバプテスマをして頂きにまゐりました、さアどうぞ」

ヨハネは之を聞いて

「否ッ、それは勿體ない、私しこそバプテスマを願はなければなりません、バプテスマは罪のある私共人間の受ける儀式で……」

「さうでもありませう、けれども私はこれから世界の人の身代になつて働くのですから、バプテスマをも受けなければなりません」

その方はヨハネと一しよに河に入り、水に沈んであげられました、

その時、にわかに天があかるくなつて、光が鴿のやうな形をして其方の上に降りました、ヨハネを初め群衆は驚いて見てゐますと、こんどは天から

「これは私の大事な、かあいゝ息子だ」

といふ神様のお聲が聽えました、其息子とは申すまでもなくエス様のことで御坐います。

曠野

荒れすさむだ野原には、美しい花もなく、のどかな鳥の聲もいたしません、棘や蒺藜が繁つて、醜い石のころがつてゐる「ユダヤの野」といふのは、その名を聞くもおそろしい死海の西の方にあります。

バプテスマをお受けなされたエス様は、すぐに此の淋しい野原へおいでになりました、遙かに銀の帶をひろげた様にヨルダン河が丘のかなたに見え、死海の湖水は太陽の光を照返してゐます。

エス様はその野原に、四十日四十夜をお過しになりました、家もなければ食物もありません、何にも召しあがらずに、夜は岩崛にお眠りになり、晝は唯ジッと考へながら、歩いたり、戻つたりしてゐらつしやいます。

その時のこと、一人の醜い顔をした悪魔は、エス様のお側へやつて來て、何くはぬ顔して

「おや、誰様かと存じましたら、これはエス様でゐらつしやいますか」

「おゝ」

「だいぶお疲れの御容子、おひもじくはありませんか」

「左様、かれこれ四十日も喰べずにゐる」

何もかも知つてゐながら、悪魔はここさら驚いた風をして

「オヤ四十日も……まあ、それではさぞお腹がすいてゐらつしやいませう。何か、何かつて此處にはパン屋も御座いませんし、さやう、あなたは神様のお子だといふ事ですから、若しもホントに左様なら、譯はありません、この石をパンにして召上れな、何にも空腹い思ひをするにおよびません」

エス様は悪魔をキッと御覽あそばして

「餘計なことを申すな、人はパンばかりで活てゐるものでない、神様のお言葉に從ふことが何よりだ、誰でも天國に往きたいものは、

喰物のことよりも神様のことを思はなければならない」

悪魔はこれに返す言葉なく、こんどは別の事を話し始めました。

「御尤です、貴下は神のお子ですから、おひもじくつても構ひますまい、ではこれよりエルサレムの神殿へ參りませう」

と、エす様をお伴れ申し、神殿の頂上に立ちました。目の廻るほど高い屋根の上で、悪魔は

「仲々高うございますな、エス様、飛んで御覽なさいませよ、若し貴方が神のお子なら、神様は天の使をおよこしになつて、怪我をしないやうに、ソーッと受けてお上げするでせう」

エス様は

「何を申す、くだらん奴、用もないのに體を投げてドウするんだ、そんな馬鹿な事が出來るかい、それは神樣を試してみることで畏れ多い事だ」

悪魔はこれにも一本參り、こんどは高い〳〵山の上にお伴れ申して

「さアご覽あそばせ、何ど美しい景色、立派な眺望ではありませんか、まアあの山、あの都市を御覽なさい、金も銀も、金剛石も眞珠も、この世界にあるのです、喜樂も幸福もこの世に滿ちてゐます、ナゼにあなたは、こんな淋しい荒野にくすぶってゐらしやるんですか。

この歡樂の世界を貴方に差上げませう、……ではたゞ一事、私

をお拜みになつて下さい、わけは御座いません、たゞ拜むだけです」

これをお聽きあそばしたエス樣のお目は鋭く光りました

「言はして置けば途方もない、彼方へ往つて了へ!!……神樣の外に拜むべきものはない、金や寶を慾しいばかりに悪いことが出來るかい」

と大きな聲でお叱りになりましたから、悪魔は周章て逃げ去りました。

そして丁度四十日が過ぎました時、天使がいろ〳〵の食物をエス樣に差上げました。

甕の水

ナザレから二里ほど東にカナといふ村があります、此邊での美しい景色の土地です。ある時のこと

「お嫁さんが來るんですと……」

「へえ、どこへ?」

「どこって、まだ御存じないの……」

こんな噂がカナの村に知れ渡りました、それから間もなく、近所の人々が仕度のお手傳に集つてくる、それは〳〵大層な賑ひです。

「まア、お芽出度う御座います、當家の兄さんも御祝儀をなさるので……」

「はい、なにまだ子供で御座いますけれども、折角おすゝめ下さるもんで御座いますから、貰ふことにいたしました、何分お願ひ申します」

手傳の人々は御馳走の仕度をいたします、魚だ肉だお野菜だのと、いろ〳〵の物を煮たり燒いたり、そして陽氣な笑ひ聲が御馳走の香と交つて如何にも芽出度さうで御座います。

立派に着飾つたお婿さんは大勢のお伴をつれて、お嫁さんを迎えにゆき、間もなく美しく飾つたお嫁さんをつれて歸りました。

その中にお客さんが來る、親戚も集まる、家も狹いほどの賑ひ、その頃ベタバラといふ地方においでだつたエス樣も招ばれて遙々おいでになりました、またナザレからはお母樣のマリヤも招ばれてお見えになりました。

いよ〳〵盛んな饗應が始まりました、人々はヤレお芽出度い〳〵で氣持よく御馳走になり、ほどなく一同に飲ませる葡萄の液が無くなりました。

するとお母樣のマリヤはエス樣をよんで

「あのね、モー葡萄がなくなつたんですよ、これからまだ〳〵要るでせうから、何とかしてやつたらドーでせう」

この御相談、エス様は氣の毒に思召し、また神様のお力をあらはすにもよい機會とお考へになり

「お母様、入口に甕がおいてありますね、モー水が入つてゐますまいね、……」

「さうでせうよ」

「とにかく、若い衆に、私のいひつける事をなんでもする様にといつて下さい」

すぐに若衆がまゐりました

「先生、何ぞ御用で……只今お母様の仰せで御座います」

「では御苦勞だがね、入口にある水甕を綺麗に洗つて、水を汲み込

んで頂戴ね、……」

「ハイ、六つありますが、皆にで御座いますか」

「あゝ」

若衆はかしこまつて、早速、水をドシ〳〵汲込みました、するとエス様は

「こんどは、之れを酌んで料理長にお渡しなさい」

「へえ、この水を……」

「さうだ」

「でも、水なら彼所にも澤山汲んでありますが」

「いや、それは違ふ、これはお座敷に出すのだ」

何の事か譯がわかりません、けれども言ひつけられた通りにする約束だつたのですから、仕方なく

「あい、お長これを……」

「なんだね」

「水ですよ」

「水ならまだあるよ」

「いえ、これはお座敷へやる水ですとサ」

若衆のおいて往つた器物を見ると、水ではなくて葡萄の液が一杯はいつてゐます、何しろモーなくなつてお座敷からは催促が來るし途方にくれてゐた時ですから、如何して出來たか何處から來たかも訊

かずに、ドシ〳〵お座敷へ出しました。お座敷では

「そうら來た〳〵、……うむ之は上等だ、すてきに甘しい葡萄だ」

「ナル程、ごうして斯んなに良いのを後まはしにしたんだらう、ごこでも、悪いのを後から出すんだが、この味は格別だ」

と口々に賞めてゐます、斯う言はれて新郎も大歡び、困り切つてゐた料理長も、御祝儀のお料理を引受けてゐて御馳走が足りなかつたと言はれては、自分の耻でもあり、其家の外聞も悪くしなければならないのに、却て大手柄のやうに賞められました。

そこで、一體あれは何處から來たかと若衆を呼んで訊くと、「實はエス様にいひつけられて汲込んだ水だ、可笑しいと思つたが、その通

りにしてお前さんに渡したのです」と申しました。

さてはエス様が神様のお力によつて奇蹟なことを遊ばしたのだと、みな〳〵大層難有く思ひました。

定めし新郎新婦も、新しい家庭のためにお祈していたゞき、幾久しく幸福に暮した事で御座いませう。

二つの誕生日

氣品のある立派な老爺さん、嚴めしい着物をきてをりますが、伴者をもつれず、提灯を片手に、四月の春の朧月夜に、エルサレムの片隅の巷を歩いてゐます。

ハテ、この樣に立派な方が、今時分ひとりで、この薄きたない巷を歩くのは不思議、人目にたゝぬためと思はれます。老爺さんは

「あゝ、此家かいな、どれお頼み申します」

と案内を頼む聲に、中から出て來た人と一しよに、外側の石段から

平つたい屋根の上に登りました。

「イヤ、ようこそおいでになりました」

「はい、これは初めて御目にかゝります、私はニコデモと申すもの、かねゞ〳〵お目にかゝりたいと存じてをりました、何分よろしうお願ひ申します」

と懇切な挨拶、エス様は差向ひになつて

「さア〳〵、お樂にお掛けなさい……」

ニコデモはあたりを見廻し、人のゐないのに安心して

「時に、外でもありませんが、私は貴下を見込んで參りました、たしかに貴下は神樣の力を受けてゐなさるお方だ、ですから、この

ユダヤの國をローマから取戻して立派な國にするのは貴下のお腕でなければなりません、私はこの年をしてをりますけれども未だ耄碌はしてゐません、必ずあなたを助けて働きまする……、實はこの相談をと存じまして……」

エス樣は慈愛にかゞやく眼を以て、此老人をごらんになりました。

「ニコデモさん、君のお心は美しい、國を愛する心は頼もしい。けれども私の建てる國は神樣の國で、君達が生れ更はらなければ、その國民になることが出來ません。

まづ君が新らしく生れかはらなければ、助けて戴くことも出來ません」

ニコデモは驚いて目を丸くし、自分の耳を疑ふ樣な顏をして

「先生、……新しく生れ代れと仰しやいましても、私は此年になつて、今一度赤坊になることなんか出來やしません、それに母も夙に死んでしまひましたから、私を生みなをして吳れる人もありません……」

エス樣はこの眞面目なそして可笑な返事を、お笑ひになり

「いえ〳〵、體のことではありません心のことです、君の心が神樣のお力によつて、新らしくなる事です。

私はやがて、世界の人の惡い心を美しい新らしいものにして上げるために十字架にかゝります、私に賴る人は新らしい人になります。新らしくなつた人でなければ神樣の國に入いることは出來ません。」

「先生、でも私は何十年となく此國のために盡し、今まで立派にパリサイ宗の敎を守つたものです。それでも駄目ですか」

「ハイ、お氣の毒ですが、どんな立派なお方でも、是非生れ更らなければ不可ないのです」

ニコデモはユダヤの國の立派な政治家でしたが、エス樣のお話に驚いてゐます。エス樣は親切に解る樣に

「神樣は世界中の人をお救ひになるために、その獨子である私を、救主としてお遣しになりました、私の目的はこのユダヤを羅馬か

ら取返すのでなく、全世界を悪魔から取戻すのです、多くの人々は悪魔に捕まつて悪いことをしてゐます、私はその人々を救ふのです……」

ニコデモは、エス様の尊い御心を伺つて、自分がエス様をけしかけて羅馬と戰爭しやうと思つたことを耻かしく思ひました。

井戸

白粉や紅脂を塗つたはいゝが、どこまでも下品な女、派手な着物をだらしなく纏ひ、人目にかゝるのを耻るためか、誰も水汲をしない晝の十二時頃、水瓶を肩にして參りました。

夏の日はぎり〳〵照りつけてゐます、女は誰もゐないのに安心して井戸端に來ると、見なれぬ一人の男が腰をかけてゐます。女の近よる方へ目を擧げて

「おかみさん、水一杯飲まして下さい」

と柔しく賴みました、こゝはユダヤの隣國、サマリヤのスカルといふ邑の郊外、こゝいらの井戸は釣瓶をつかひません、各自が紐のついた水瓶のまゝ汲込んで引上げるのです。

女はジッと其男子の人物を見ましたが、日頃仲のよくない隣のユダヤ人と思つたものですから

「なに、あなたはユダヤの方でせう、それに水をお吳れもないものだ、勝手に召上つたらいゝぢやありませんか」

釣瓶も水瓶もないのに態と意地のわるいことを申しました。其人は

「では私を敵の者と思ふのか、だがね、おかみさん、それは間違つてゐる、若し私が何者だか解つたらお前さんの方から私に、ドウ

ゾ飲まして下さいつて賴むだらう、さうすると私は渴くことのない水を上げるんだが……」

女は、をかしなことを言ふ人だと思ひながら

「だつて、君なんにも持つてゐないぢやありませんか、この井戸は仲々深いんですよ」

「否、この井戸の水のことぢやない、この水なら飲んでもぢき渴くでせう、私のは先刻も言つた通り、渴くことのない水だ、活きた水だ、いつまでも心持のよい水だ」

女は之は不思議なお方だ、ことによると預言者かも知れないと思ひはじめましたから、だん〳〵言葉を改めて

「先生、ではドウゾそれを頂かせて下さい、モー毎日汲みにくる世話のないやうに……」

「よろしい、夫ではあげますが、その前に一寸お前さんの旦那を呼んでゐらつしやい」

「でも私に夫がありませんの……」

「さうだ、モー以前にはあつた、五人あつたね、そして今のはホントの旦那ぢやないんだね」

女はお言葉を聽いて震ひあがりました、初めて會つたのに、自分のこれまでの悪いことをのこらず御存じです。

「先生は預言者でせう、では伺ひますが、私共サマリヤの國ではあ

のゲリシムの山で神樣を拜むのだと申しますし、ユダヤの方では、ナニそれは不可ない、エルサレムの神殿で拜まなければ御利益がないと申しますが、どつちが良いので御座いますか」

その方は、この女の心がだん〳〵柔しくなつて來たのをお喜びになつて

「それは何處で拜んでも構はない、私に頼りさへすれば神樣は、何人でも可愛がつて下さる。神樣は目に見えないお方、何處にでもゐらつしやる、だから、どこでお祈りしても聽いて下さる……」

「先生よくは知りませんが、いつか私共を救つて下さる救主が、此世においでになるといふ事ですが、そんな事が御座いますか」

「あゝ、あるとも、お前さんと話をしてゐるのは其……救主だ」
女は氣が狂ふ程おどろきました
「あゝ勿體ない、あなたは救主でゐらつしやいますか、とんだ御無禮を申しあげました、敵國の人とまで思ひまして、……申譯も御座いません」
この時、ドヤ〳〵人の來る音がしました、これは弟子達がエス樣を井戸端にのこしてお辨當買ひに邑へ往きましたが、丁度歸つて來たのです。女は水瓶を置いた儘ドン〳〵驅けだしました。弟子達は
「先生、お待遠ほさまでした、彼女なんです、氣狂ですか」
「イヤ、今お話をしてやつたのさ」

「お辨當を召しあがれ」
「なに、別段おなかも減かない」
「では、彼女が何か貴下に差上げたんで御座いますか」
「さうぢや無いが、私は天の神樣の敎を哀れな人に聽かせる事は、御馳走たべるよりも嬉しいよ」
一同がお晝食をたべてゐますと、邑の方から大勢の男女がやつてきます。
見れば先刻の女が先頭になつて
「あれ、あそこです、救主さまが……」
そして群衆は、無理にエス樣に願つて、スカルの邑に來ていたゞき

ました、エス様は二日お泊りになつて、いろ〳〵お話をなさいました。

罪深い女でも、エス様にお賴りして、生れ更つた人になりましたので、自分ばかりでなく、澤山の人にエス様の難有いことを知らせる事が出來ました。

大漁

時は五月初の春でした、小山に圍まれたガリラヤの湖水は美しい小波をたてゝゐます、この湖をゲネサレの湖ともいひました、ヨルダン河はこの湖水から流れてゆくのです。

この湖水に沿ふてカペナウムといふ立派な市があります、ガリラヤ州のお役所は大抵こゝにありました、そして湖水からは澤山お魚がとれるので、漁夫も澤山棲んでをりました。

ある日のこと、エス様はその靜かな湖の畔に立つて、沖を御覽にな

ると、シモンといふ人の舟が見えます。

「オーイ、オーイ」

シモンは別名をペテロと申します。弟のアンデレと一しよに此聲を

きいて

「あゝ先生様だ、なア……」

「え、先生様だ、いつのまに此方へおいでになつただか」

急いで舟を岸につけました。エス様はこれにお乘りあそばして、岸

に集つてゐる人々をお敎へになりました、それから

「ペテロや、沖へでゝ網を下して御覽！」

「いえ、駄目です、モー昨夜は夜ごほしやつてみましたが、鰯一尾

これませんでした」

「イヤ、さうでない下して御覽」

「では、一網おろして見ませう」

それから艪をまはして、エーンヤ、エーンヤと漕ぎ出てざぶり、ざ

ぶりと網をおろして繩を曳くと、驚いた、曳きあげられないほど澤

山の魚、網が裂けさうになつてゐます。近くにゐる仲間の舟をよん

でお魚を曳きあげると、その重で二雙のお舟が沈みさうです。

ペテロは腰が拔けるほど驚きました

「先生、これア大變です、私等何十年ってこの湖に稼いでゐますに、

こんなにおッたまげたことはありません」

「これしきの事は驚くに及ばない、お前達はこれから私と一しょにお魚をとることでなく、世の中の人を罪の中から救ひあげるために働くのだ」

と仰せになりました、二人は大喜びで岸に漕ぎ戻りますと、これも二人兄弟のヨハネとヤコブ、暖い日に照されながら、舟の中で網を繕してゐます。

「やい、見さつせ斯んなだ！」

「ひやァ、たいしたもんだなァ」

「なに、モットよい事あるだよ、ヨハネさんもヤコブさんも、此方へおいで」

と氣輕なペテロは二人を召びよせて、自分がこれまでとてもエス樣を信じてはゐたが、こんどはエス樣のお弟子になる積りだと話しました。

二人もやはりペテロ、アンデレとおなじ樣にエス樣の信者でしたが、何もかも打棄てゝエス樣のお弟子になりました、二つのお舟に一杯のお魚を捕つて驚いた此人達は、後日、一時に三千人を信者にしたといふことがあるのです。

今もガリラヤの湖水は昔とおなじです、日に燒けた漁夫が棲んでゐます、エス樣はその樣な人々の中から最初のお弟子をお選びになりました。

また幾日かたつて、エス様はやはりカペナウムの街をあるいてゐらしやると、マタイといふ人が、お役所にゐて仕事をしてゐるのが見えました。

この人は稅吏といふて、その頃人々から無理なお金をとるので、厭がられるお役人でした。けれども、つひ近頃エス様を信ずる樣になりましたから、斯んな惡い職業を廢めなければならない、と考へてゐました。

そこへ丁度エス樣は

「お前も、私のお弟子にならうぢやないか、お金を取りあつめるよりも、人の魂を天國に集めるためにお働きなさい」

と仰しやつたので、マタイは渡りに船、すぐに決心してエス樣に從ひました。

そこでマタイは大勢の知人やお友達を招んで

「私は、此度稅吏をやめてエス樣のお弟子になりました、ながゝお世話になりましたから、今日はお告別に、心ばかりの物を……」

と言つてエス樣を中心にして、賑な御馳走をいたしました。

もとよりマタイのお友達などに、碌なものはありません、やはり稅吏仲間が多かつたのです。カペナウムの學者達はこれを見て、なんだエス樣は、あんな下等な人間の中にまじつて見つともないと思ひ、お弟子達に向ひ

「オイ君等の先生の態はなんだね、下卑てるぢやないか」

と言ひますと、エス樣はこれをお聞きになつて

「いや、君等は違つてる、お醫者は病人を相手にするんぢやありませんか、私は罪ある人々を對手にし、彼等を救つてやるのが使命です」

と仰せになりました、このお言葉に學者達は一言もありませんでした。

起きよ

「オイ、芳雄や、おきるんだよ」

寢ころんでゐるのを起すのなら譯はありませんが、重い病氣のために三十八年も起きることの出來ない病人を、たゞ一言で起たせる事は、私共人間の力に出來ることではありません。

さてエルサレムの都は街の外を立派な石垣で圍み、十二の門があつて、そこから出入をしてをりました、その門の一つに「羊の門」といふのがあつて、附近にベテスダの池がありました。

土地の人々の申しますのに、時々天の使が降りてお池の水を動かす時、眞先に入つた人は、どんな病氣でもちきに癒るといふのです。そこで澤山の病人がその周圍に集つて、年中「いまか、今か」と水の動くのを待つてゐます。ところが其中に三十八年病み煩らつてゐる男がありました、何年となく此池の側にゐて、癒りたいものと待ちあぐんでゐます。

或日のことに、一人の氣品い人がやつてまゐりました、毎日〳〵怠屈してゐる病人たちは

「誰か來ましたよ、新しい病人でせうか」

「いゝえ、病人ぢや無いでせう」

「あんな血色のよい病人があるもんですか」

ご噂をしてゐます。その中に其方は一番重い病人を御覽になり

「おい爺さん、癒りたいか」

「ハイ、癒りたう御座います」

「もう隨分久しいんだらう」

「はい病みはじめてから三十八年になります」

「……」

「こゝに參りましても、御覽の通りろくに身動きもできませんので、私が入らうとするうちに、他の人が入つて了ひます、ドーにも癒る時機がありません」

「さうか、夫は可憐相だ、私が癒してあげやう、さァお立ちなさい、そして寝床を持つてお歸りなさい」

ごうでせう、お蒲團までも持つて往けとは驚くぢやありませんか。病人のお爺さんはドーしたでせう「へン、戯談ぢやない、人を馬鹿にしてゐる」と怒つたでせうか、ところが爺さんは其お言葉通りに、「ヤア」とかけ聲しながら起きると、見事に立てました。嬉しくてたまりません、寝床をたゝんで出かけやうとします。すると其方は

「おい、どうだ私の言つた通り癒つたらう」

「へい、難有う存じます、あんまり嬉しくつて夢のやうで御座います」

「おゝ左様だらう、これからは二度と悪いことをするんでないよ、神様に頼つて義しい世渡をおしなさい、さうでないとモツトひどい病氣になるよ」

とお敎へになりました。そして三十八年目に別の人間の様になつた爺さんも、癒して下さつた方も此處を去りました。

殘つた病人達は呆氣にとられて見てゐましたが、お互に顔見合はして

「あれは誰様でせう」

屋根の穴

「お説教があるんですッて、聽聞に參りませう」

「何處に……」

「あの荒物屋の横町のKさんの家で」

「は、參りませう」

と諸方からあつまつた人々は、早や、その人の家に入つて、坐るところもなければ立つ所もありません、玄關も戸口も人でもつて一杯、これは近頃大評判のエス樣の難有いお説教を伺はうといふのです。

「オイ〳〵、そんなに押しちやいやですよ」

「だつて、エス樣が見えないんですもの」

「見えないたつて、無暗に押しちやだめです」

「シ、シ、そんなに騒いちやお話が聞えませんよ」

なにしろ大層な人です。

するとまた後から

「ハイ、一寸御免下さい、少しお通しなすつて下さい」

誰かと見れば四人の人が戸板に病人を載せて來て、その中に押込まうといふのです。

「ハイ、少々御免下さい」

いくら言つても路をあける者はありません。

「どうぞ、皆さん、お通しなすつて」

「おい〳〵、お前さん方、お通しなすつてもあつたもんぢやない、それや駄目ですよ、この人込みの中へそんな大きな者を舁込まれるものでない」

「でも、ドウゾ」

「それや、いけね、私達のやうな空身でさへ入いれないで斯うしてゐるものを、それや到底も無理だ」

と爰にまた一と騒がはじまりました、そして何んとしても入れて呉

れません、イヤ入れることが出來ないのです。

四人は落膽して途方にくれました。

「オイ、どうしませう」

「さうね、折角こゝまで來てゐて……」

「歸らうか」

「それは不可ない」

この人々は、エス樣の不思議な御力を見、どうかして兼ねゝ、中瘋癲といふ病氣に罹つて悲しんでゐるお友達を、エス樣のおそばへ連れてつて癒していたゞき度いと思つてをりました。

ところが、折よくエス樣がカペナウムへおいでになつたので、此時

こそと思つて友達のところへ驅けつけ、漸く舁いで來たところが、この混雜で入いられないのですから、落膽したのも無理はありません。

けれども、間もなく四人は何を考へたか、家の外部に屬いてゐる階段を登りはじめました。

「よいしよ、よいしよ、いゝか氣を付ろよ」

「よしきた、よしきた」

だん〳〵登つてゆきます、群衆は屋根の上で一と休をするのだらうと思つて見てゐます、やがて屋根の上に見えなくなりました、ユダヤの家の上は平でした。そこで群衆はしづまり返つてエス樣のお話

を聞きました、エス樣はいろ〳〵と難有いお話をおつゞけになつてゐます。

すると、遽かに天井がメリ〳〵音がします、そしてまもなく天井板が取除けられて穴があきました。だん〳〵それが大きくなつて四人の顏が見えました。

「おや、なんだらう」

と群衆の顏が上にむかうと、埃が目や口にはいる

「ペッ、ペッペ……これや大變だ」

おどろいたのは此家の主人です、大いそぎで屋根に驅けのぼり

「お前さん達、なにをするのです、他の家に穴をあけて……」

「いや、まことに申譯もありません、實は……」

これ〳〵と委しく譯を話しましたら、主人も

「それは感心なことだ、それなら構ひません……」

と快くゆるしてくれました、そこで四人は中風の友達を戸板に寢かしたまゝ縋おろしました、下の群衆は、こんどは何をおろすのか、押しつぶされては大變と騒ぐ者もある。

その戸板は丁度よくエス樣の前に下されました、病人も癒していただきたいばかりに、四人のするがまゝになつてゐます。エス樣はこの熱心を御覽あそばして

「お、宜しい、お前の今までした罪惡は殘らず赦してあげるから安

心するがよい」

ところが群衆の中に交つてゐた意地の惡るい學者たちは心の中で、

オヤこれはひどい、神樣でもないのに人間の罪を赦すなんて、出鱈目を言ふにも程があると思ひました。

エス樣は神樣とおなじ權力がありますから、人の病氣をなほすことも、罪を赦すことも出來なさいます、そしてまた此人達の意地わるい心もすぐお解りになりました、そこで

「皆さん、私は神樣とおなじ權力がありますから、お醫者や藥でも癒らない此病人の、罪を赦すことも體をなほすことも同じです」

と仰せになりながら、凛としたお聲で

「さア、立つて御覽……」

こ病人におほせられました、病人は呆氣にとられてゐます。

「でも、先生いまゝで何年となく動けないんですもの、立てッても駄目ですよ」

「いえ、私が言ひつけたからには大丈夫だ」

病人は叱られたやうな氣持がして「へえ」と體を動かすと、まあ驚いた、苦もなく起きあがることが出來ました。モー夢のやうです、嬉しくつてたまりません。エス樣は

「では此蒲團をたゝんでお歸りなさい」

「はい、……」

まあどうでせう、今まで蒲鉾が板にくつ着いてゐる樣に、何年も床から離れたことのない病人が、たちどころに寢床を捲りあげ、自分で擔ぐことが出來ました。

「あゝ、エス樣なんとも難有ございます、こんなに嬉しい事はありません……」

こ幾度も〳〵お辭儀をし人込みの中を押しわけて、躍るやうな跳ねる樣な勢で外に出ました。

これを見た四人は、大急ぎで戸板をたぐり上げ、楷段を驅けおりて、丈夫になつた友達に抱きついて、涙を流して喜びました。

日曜日

七日に一日お休みだ、月、火、水、木、金、土それから日曜、なぜ其日曜がお休みか、火曜か水曜がお休みでもよさ相なもの、その日曜日に就てお話いたしませう。

それは夏初めのこと、黄金いろの麥は熟した穂を上にむけてゐます、その畑の路をエス樣がお弟子たちとお通りになりました。

其日は日曜日の朝でした、昔は日曜日とは言はないで安息日といふておりました、お休の日といふことです。

まだ朝の御飯をたべなかつたので、弟子たちは路傍の穂を摘んで、兩手でゴシ〳〵揉んで頬張りました、ユダヤの麥はソウして喰べる事が出來ました、そして路傍のは誰が摘ても叱りません。

お腹が減てゐますから幾度も〳〵モグ〳〵やつてゐるのを、通りがかつたパリサイ宗の人達は

「先生、あなたのお弟子は何故あんな悪いことをするのです、日曜日は休む日で、あんなことする日ぢやありません」

「否、麥を揉んで喰べても構ひません、誰が不可ないと定めたのです、それは貴君がたが勝手にこさへた規則です、麥を摘んで一寸たべることは、日曜日を休まずにお仕事をする事と違ひます」

「……」

「私は神様と同じ立法者ですから、人が勝手にこしらへた規則にしばられる者ではありません、……一體あなたがたは未だ日曜日は何をする日か知らないのです、唯何にもしないで默つてゐるのが良いのでなく、此日は普通の職業は休んで、神様のため世の中の人のために善い事をする日です」

こお教へになりました。

この日、一同はカペナウムの會堂にゆくのでした、エス様もお弟子も、パリサイの人達もゆきました。

こころが大勢の中に、片手の利かない不具な人がおりました、この

人はドンナに不自由だかわかりません、私共がもし左様だつたら如何でせう、着物を着るにも御飯を頂くにも、字を書くにも困るでせう、エス様はこの人をかわい相に思召しました。

パリサイの人々は

「先生、あの……日曜日に病人を癒すのは如何でせう」

ユダヤの人々は日曜日にそんなことしてはならないといふ規則をこさへておきました、エス様は

「さうですね、貴君がたは若し羊が過つて日曜日に坑に落ち、苦しんでゐたらドウします、日曜だから仕方がないと言つて打棄ておきますか、まさか、そんなことはしないでせう。……

で、人と羊と孰が大切でせう、羊なら構はない病人は抛つておけと言ひますか、日曜日は人を助ける日で、親切をする日、神様を拜みその御心を行ふ日です」

それから、向きかはつて不具な人に

「お前さん、その利ない方の手を延ばしてご覽なさい」

「先生、御戯談ぢやありません、延ばさうたつて利かないんで御坐います」

「否、だから私が言ふのだ、私のいふ通りにしてご覽なさい、さア伸ばして」

其人はエス様の仰せを信じて伸ばしましたら、わけもなくちやんと

癒つて了ひました、その人は思ひがけない幸福におほ喜びです。斯してエス様は日曜日に善い事をするお手本をお見せになりました。日曜日の起源についてはあとで申しますが、日曜日は何をする日かお解りになつたでせう。

十二人

何處へ往つても人の山、それに彼方からも此方からも病人が來てお癒し下さいといふ、忙しいので御食事あそばす隙もありません、エス樣は朝から晩まで、語りつゞけ、働きつゞけでゐらつしやいました。

その當時のこと、お弟子たちをつれて、カペナウムを少し離れた山に登り夜通しお祈りになりました、それは天の神樣と御相談あそばす爲めでした。

その御相談といふのは御自分の御仕業の手傳ひをするお弟子を定めるためでした、忙しい御自分の御用をつとめさせるのですから、容易いことではありません、お祈禱がすんだ朝、大勢のお弟子の中から、十二人だけお撰びになりました。

それは眞先にお弟子入りしたペテロと其兄弟のアンデレ、それからヤコブとヨハネの二人の兄弟。ピリポとバルトロマイ。次ぎはマタイ。トマスなんだかトマトと間違ひさう。それからヤコブ、これはヨハネの兄弟と間違はないやうにお父さんの名を上にくつ附けてアルパヨの子ヤコブといひました。次はシモン。ユダこの人はアルパヨの子ヤコブの弟、これで十一人、もう一人はイスカリオテのユダ

です、ユダといふのが二人ありますから、一人にはイスカリオテといふ生れた土地の名をつけて呼びました。

この十二人を多くのお弟子と區別するために使徒といふ名稱をつけました、この中一番よく知られてゐるのはペテロ、ヨハネ、ヤコブ、それからマタイでせう、それに悪いので名高いイスカリオテのユダです、悪者で名を得ることは恐ろしいことです。

この人々は別段お金持といふでもなく又偉い學者でもありませんが、神様の御力を顯はすためにエス様は態とお撰びになつたのです。

十二人は一人びとり違つた性質の人達で、世界中の人類の性質を集めたやうなものでした。

私共のうちにペテロに似た人もあり、ヨハネのやうな人もあるでせう、ピリポのやうな人も、マタイに似た人もありませう、此御本を讀んでゐる内に十二人のお弟子の性質もだん〳〵解ります、併しイスカリオテのユダの様にはなりたくありません。

ユダはどんな悪い事をしたでせう、その事もおひ〳〵にお話いたします、一體ユダといふ人は最初つから悪い人ではないのです、エス様のお撰びを受けた時は大層頭のよい考の深い出來る人でした、それでエス様も此人にお金をあづけて、御自分たち十三人の生活をたてさせました。

この十二人は何時でもエス様と一しよに暮し、どこへゆくにもお供

をいたしました、そしてエス樣の遊ばすことを見習つて、いろ〳〵ご人を敎ゆることを學びました。

鳥と花

美しい湖水を東に見渡した、青草が繁り、野百合の咲いてゐる小山のうへに、大勢の人々が集りました、無論エス樣のお話を伺ふためでした。

十二人の使徒はもとより何百、何千とも知れぬ人々は小山を埋めて、いまか〳〵とお話のはじまるのを待つてゐます。

エス樣は銀鈴のやうなお聲で

「お聽きなさい、——自分で何もかも知つたふりして威張つてゐる

人は幸福でせうか、否、そうではありません、いつも心の中でまだまだ足りないと思つてゐる人が幸福です、さういふ人は天國に入りたいと努めます。

自分で、何故私がこんなに悪い癖があるだろう、なぜ信仰が薄いだろうと悲しむ人は幸福です。その人はキツト立派な徳の高い人になることが出來ます。

柔しい人は幸福です、この世ながらに天國の樣な心で暮すことが出來ます。

義しい人になりたいと一心に思ふ人は福であります、その人はキツト滿足することが出來ます。

慈悲ぶかい人は福です、その人はまた他の人からも可愛がつていたゞく事ができます。

心の清い人は福です、神樣は罪を棄てない人の心にはお見えになりませんけれども、悔改めて清い心になれば、神樣ここ一しよに暮すことが出來ます。

誰にでも親切に、人のために善い事をする人は福です、その人は神樣の子供と言はれる事が出來ます。

義しいことを行ふ人は幸です、そのために憎まれたり苦しめられたりしても構ひません、神樣はその人に天國の幸福をお與へ下さいます。

私のために人から苛められたり、責められたり、また欺されたりなどするでせう、それも結構なことです、神樣は必らず、天國でその御褒美を下さいます」

人々はエス樣のお言葉に聽とれてゐます、まづこの九ツの幸福なことをおほせになつて、それから

「あなた方は皆、こんな幸福な人におなりなさい、ソウすれば世の中の人々は、あなた方を見て、あゝ天の神樣は難有いお方だと思ふ樣になります。

神樣は世の中の人を殘らず可愛つてゐらつしやいますから、義しい者にも惡い者にもおなじ樣に雨を降らせ、日を照らして下さい

ます、ですから私共も凡ての人に親切を盡さなければなりません、親切にして呉れる人にも、また意地の惡い人にも柔しくしておやりなさい。

けれども親切を他人に見せびらかしたり、熱心ぶりを人に見せつけてはいけません、神樣は人知れぬところで祈ることをよくお聽き下さいます。

そしてお祈禱する時には

天に在ます我儕の父よ、願くは聖名をあがめさせ給へ、爾國を臨らせ給へ、聖旨の天に成るごとく地にも成させ給へ、われらの日用の糧を今日もあたへ給へ、我儕に罪を犯す者をわが赦すごとく

われらの罪をも赦したまへ、われらを試練にあはせず惡より救出したまへ、國と權と榮はかぎりなく爾のものなればなり。

アーメン（アーメンとは本當にさうでありたいと言ふこと）

こお言ひなさい。そして矢鱈に心配したり、氣を揉んだりするものではありません、神樣は私共のことを何時でも考へてゐて下さいます。

ですから、衣服やお金のことを心配するよりも、心中の義しくなること、幸福になることを考へなさい、お金も大事なものですが、この世だけのものです、私共は永遠なくならない心の寶の方を大事にすべきではありませんか。

アレ鳥が飛んでゆきます、あの鳥は自分の畠も倉もありません、けれども神樣は養つて下さいます、これ、この足下に咲いてゐる花だつて左樣でせう、神樣がこの美しい葉、この綺麗な花片をつけて下さるのです。

まして、私共人間をお見棄てになることがありませうか、決して心配苦勞するには及びません。

けれども、お氣をつけなさい、神樣に從つてゐなくつては駄目なんですよ。氣儘な、だらしのないことをし、世の中のくだらない樂に浮かれてゐる人は地獄に行つてしまうのです。

私の敎へてあげることを、良く聽いてそして遵つて下さいね、聽

いてよく遵る人は岩の上にお家を建てた人の樣なものです。聽いても遵らない人は砂の上に建てた人のやうです、暴風や大水になれば、どちらが駄目かすぐに解ります」

エス樣はこの樣な益になるお話をいろ〳〵面白く、しかも嚴然さお敎へになりました、そして山をお降りになつて、カペナウムにお歸り遊ばしました。

大あらし

美しい秋の空に暖かい日が心持よく照つて、ガリラヤの湖水は油を流したやうに靜かです、岸邊には山の樣に人が立つてゐます、水の上に一艘の舟が繫いであつて、その中に立つてお話してゐる方が御坐います、透澄る聲は水に響いて遠くまでも聞えます。

「ご覽なさい、彼處の畑にお百姓が見える、あれッ種を蒔いてゐる。あの種はどんな土地に落ちますか、まづ四種のところに落ちるのです。

第一は路傍に落ちる、その種はすぐ空の鳥に喰べられます、アレあんなに鳥が飛んでゐるでせう、あれが喰べやうと待ち構へてゐます。

その次のは礫地に蒔かれます、上に少し土がありますから一寸は生へますが、根が淺いので水の潤ひもなんにもありませんから、すぐ枯れてしまひます。

三番目のは藪の中です、棘やら蓬やらが澤山生へてゐますから、生へるには生へますし、育つてはまゐりますが、仲々花も實も結びません。

四番目のは良く耕したところに蒔かれ、芽をだし莖となり、五十

倍も六十倍もの實を結びます、この善い畑に蒔かれたのはホントのです、もちろんお百姓も善いところに蒔かうとするのです。

あなた方も心善い畑に私の話をお植ゑなさい、耳があつて聽える人はウツカリしてゐては不可ません」

群衆は遠くの畑を見ながら、面白くお話を伺ひましたが、たゞの種播のお話ではない何か意味がありさうですから、謎のやうに思ひました。

そこでお弟子は

「先生、いまのお話はなんの事で御坐いますか、解つたやうで解らないやうで……」

「左樣？種といふのは神樣のお教です、路傍に落ちたといふのは、教を聽いても馬耳東風でゐる人のことです、惡魔は此人の心からすぐ其教を奪出してしまひます。

磯地といふのは薄べらな考への人で、その時はすぐナル程、神樣の教は結構だと思ひますが、ぢきに忘れて了うのですから、善い人になれません。

棘叢の中といふのは、慾ばつたり、他を妬んだりつまらない宴樂に心をひかれて、お話を聽きたくつても怠ける人です、やはり立派な人になることが出來ません。

けれども、善い畑といふのは、眞底から神樣の教を伺ひたく思ふ

人で、何をおいても神樣の教を遵る人です、この樣な人はズンズン立派になつて、喜悅、慰安、正義、慈愛などの德がどつさり出來てくるのです、この事を五十倍六十倍の實を結ぶといふのです」

群衆は立ちづめですが足のだるくなるのも忘れて聽いてゐます、その中に太陽は西にかげつて參りましたから、お話もおしまひになりました。

すると群衆は家に歸り、舟はそのまゝ十三人を乘せて沖へ漕ぎだしました。

その中に、日はトップリ暮れて暗くなりました、舟は靜かな闇の中

大あらし

に漕いでゆきます、この一行は誰でせう、……これはエス様と十二人のお弟子達でした。

エス様は日中のお疲勞で、小さい船房におはいりになつて、グツスリおやすみなさいました。弟子達は疲れてゐませんから、元氣よく交る〳〵櫓をこいでゐます、「エーンヤ、エーンヤ」と調子をとる聲があたりに響きます。

ところが遽かに恐ろしい風がドーッと吹いてまゐりました、いままで靜かだつた海が急に暴れだして、舟は上に下に搖られます。

「ドウだろう、大したことァあるまいか」

「さうさね、解らないな、……サ、誰か交つて頂戴よ」

「よし〳〵」

力を込めて漕ぎますが、舟は浪に動かされて躍るばかり、水はザアザアお舟にはいります。

「これは適はない！」

「モすこしやつて見やう」

「僕が代らう！」

と、また新手をかへてみましても甲斐がありません、舟はます〳〵搖れて今にも沈みさう、水はもう半分ぐらゐも入つてゐます。

「オイ、先生を起さうよ……」

「うむ、然うだ、先生も仕樣のない方だ、僕達はこんなに難儀して

ゐるのに……」

「先生〳〵、大變です、助けて下さい、私達はモー死にさうになつてゐます」

「早く、早く、助けて……」

おろ〳〵啼き聲だしてゐる者もあります、するとエス樣はお起きになり、お立ちになつて

「風よやまれッ！

涙も靜まれ!!」

とお呼びになりました、すると風はピッタリやみ涙はゾロ〳〵碎けて、もと通り靜になつて了ひました。弟子達は腰も拔けるほどの驚

き、

「イヤー驚いた」

「うむ、先生はこんなにお偉いと思はなかつた」

エス樣は振返つて、

「お前達はドウして斯んなに意氣地が無いんだ、私が一しよに居さへすれば何んな事があつても決して心配するに及ばない」

とお敎へになりました。

夜が明けると、其處はガダラ村の岸でした。

ふしぎなお父様

お母さんと二人の子供を置きざりにして家を飛びだしたお父さんがあります。子供達はお父さま、お父さまと呼んでも振りむきもせず、ドン〳〵往ってしまひました。

お父さんは何處へ行つたのでせう、何して行つたのでせう、薩張りわけが解りませんでした。すると二三日たつて、お父さんは湖邊の山のお墓の中にゐるといふ事を聞きました。

お墓といふのは山の岩や堅い土を横に堀つた洞窟でした、大抵大き

な石を蓋にしておきますが、モー空っぽになつてゐるのもありました。

お父さんは、何を考へたのか、其氣味のわるいお墓に住んでゐるのです、そして顔も服裝もスッカリ變つて見る影もありません、……

お父さんは惡鬼にとりつかれて狂人になつたのです。

お母さんは毎日泣いてゐます、子供も心配して泣く、お家の中は火が消えた樣になりました。

「ね、お母さま、お父樣はドーしてあんなになつたでせう、……ねえ」

「なぜだか解らない、ドーして私達はこんなに不幸なんだろう」

三人は涙のかわく日とてはありません。ところが或日のこと、お父さんが歸つて參りました、そしてお家の前に來ると大きな聲で

「こらッ、なぜお前達は私を追ひだした、私をあんな所へやつたのだ……アーン」

と怒鳴ります、そこでお母さんは出て

「あなたはまァ、なにをお言ひになるのです、追ひだしも何もいたしませんよ、さ、お入り遊ばせ」

「なにッ、現に此通り追出してからに、おひださないもないもんだ」

と言ふより早くお母さまをピシャン〳〵と撲りました、これを聞き

つけて、近所の人々は、驅けつけお父樣を取りおさへましたが、強くつて強くつてトテもかなひません、ポン〳〵拋り投げられます。そこで人々は手足に板を挾んで、釘でうちつけましたけれども、ばりばり破つてドン〳〵お墓へ逃げてゆきました。

お母さまはあんなになつたお父樣を見て、ドンナに悲しかつたかわかりません、それにお家は働くお父さまがゐないのでだん〳〵困つてまゐりますから、お母さまも斯なことではならないと、心を勵げまし、他のお仕事をしたり洗濯をしたりして細い生活を立て居りました、そして二年も三年もたちましたが、お父さまは少しも良くなりません、人々は名をつけてレギョンといひました。

それぱかりでなく、昨日はどこそこの小父さんに喰つてかゝつて怪我をさせたの、明日は誰それの羊を殺したのといふ事ばかりです、既早いつ癒るとも望みがありません。

＊　＊　＊

ところが或る年の秋、美しく晴れた朝でした、二人の子供はお家の前で遊んで居りました、すると其ガダラの村は大騒ぎです。

「え、何したんです？」

「なにレギヨンが豚を殺したんですって？」

「にッ、二千匹？これや大變だ」

と驅けだします、これを聞いた子供たちは中へはいつて、お母様に

その話をいたします。お母さまは亦お父さまが何か亂暴をなさつたに違ひないと心配しました。

暫くすると子供達はまた家に入つて

「お母さま、お父さまが來ましたよ」

「オヤッまた……、こつちへお入り、そこを締めませう、お父さまは復どんな亂暴なさるかも解らない」

と、戸やら窓やら皆締めて了ひました。そして子供達は小さな穴から外を見てゐます。

「お母さま、お父様ちやないのよ」

お父さまは酔漢のやうな歩き方をするのに、其人はシヤンと歩いて

來ます、いつも怒鳴りちらして來るのに今日は靜かに來ます、けれどもお母さまは

「靜かに、靜かに、矢張りお父さまだよ……またドンナ亂暴をなさるかも知れないよ」

お父さまは戸口に立つて、コト〳〵と輕く叩きました、けれども、中では默つて居ります。するとこんどは柔しい聲で

「まり子や、まり子や」

とお母さまの名をお呼びになる、その聲は何年となく聞かなかつた正氣なお父樣のお聲です、これを聞いたお母さまは、遽に中から飛びだしましたので、子供達は驚いてゐます、するとすぐお父樣とお母

さまは手を把つてお家に入りました。

「おい太郎、どうした、お父樣は今歸つたよ」

「……」

それから親子四人で神樣の惠を感謝いたしました。

「お父樣、ドーしてお癒りになつたの？……」

「おゝ其お話をしやう、そのお話、私は嬉しくつて仕樣がない、それはね今朝早くだつた、湖水の方を見てゐると一艘のお舟が着いてるんだ、ハテ何んだろうと思はず側に往つてみた。すると一、二、三……さ、十二三人の人がおつた、その中一人は神の御子のエス樣だね、難有い方だ。

ところが、私の心を押へてゐる惡魔は苦しみだした、エス樣を恐がつてゐるので、なんとかして逃げやうと、私を曳きだすけれど、エス樣は私をかわい相に思つて下さるので、惡魔の自由におさせなさらない、そして惡魔だけを追ひだしてお了ひになつた、その時に初めて正氣づいたね。

さうすると惡魔は苦し相な聲をだしてエス樣に　ではあの豚に乘移りたいと言ふのさ、宜しいと仰しやる、奴はヤット安心して豚を二千匹ほど曳きだして崖の上をかけだした。

豚はモー目が眩んで、崖からゴロ〳〵轉覆かへつて湖に入つた、若しエス樣が私を助けて下さらなかつたら、私が豚と同じ目に遭

はされるところだつたのさ、思うてさへ慄とする。

エス樣のおかげで死んで了うところを助かつたばかりでなく、こんなに癒つてお家に歸へれたとは、何といふ難有い事だらう、これからはモットお前達を可愛がつてあげるよ、また世の中のために働いて、お詫びしなければならない！」

一同は涙を浮べながら聽きました、そして誠に樂しく暮す樣になりました。

一人娘

カペナウムの邑にヤイロといふ學校の校長さんがありました、學校といつても今の樣に立派なものではありません、その頃は會堂と申しまして寺小屋みたいなもので、安息日にはお説教もあるのでした。

ヤイロにたつた一人のお嬢さんがありました、美しい柔しいお娘でしたから、みんなに可愛がられました。

お嬢さんは毎日、お友達と一しよに會堂に往つて御本や算術を習ひ

ました、學校がすめば廣い野原に伴れだつて、百合やアネモネや薔薇の花の咲いてゐる中を驅けまわつたり、または清水の湧いてゐる谷間に降つたり、無花果の果を採つたりして、林檎の樣な頰べたにいつもニコ〳〵した笑ひを浮べておりました。

ところが十二の年の秋でした、お嬢さんの美しい紅い色が無くなつて、いつしか青白いお顔になりました、お父さまやお母さまは大層ご心配なされて

「花子や、お前どんなでもないかい、どこか悪かないの……」

「どこが、どうといふんぢやないんですが、すこうし心持がわるいんです、たいした事はないでせうよ」

親思ひのお孃さんは、なるたけ御心配をかけない樣にして居りました、それでもお父さまはお醫者を招んで診ておもらひになりました、矢張り大したことは無いと言ひました。

けれども、やつぱり思はしくないで、遂々ドッカと床についてしまひました。

ですから、お父さまお母さまは勿論のこと、近所近邊の人々も大騒ぎをして「まア、お孃さまはホントにお氣の毒だ」と涙をながす人もありました。

ヤイロは此邑のためによく盡す人でしたから、誰もかれも、この事を聞きつたへて心配いたしました、人々は手に手をつくして看病し

ましたが、すこしも効果がありません、だん〳〵骨と皮ばかりに痩せて目もあてられい容姿、息も絶え〳〵になりました。

ところが、其時エス樣が邑においでなされたといふことが知れましたから、ヤイロは今まで一寸も病人の側を離れなかつたのに、遽かに飛び出しました。近所の人々はこれを見て驚きました。

「オヤ、旦那が馳せてゆかれます、お孃さんに變つたことァないでせうか」

ヤイロは誰がゐやうと挨拶もせずに走せました、そしてエス樣が大勢の人に圍まれてゐる中へ割込んで、地べたに坐り

「先生、先生、私の娘は大病で、手に手を盡しましたがどても駄

目、いまにも死にさうで御坐います。ドーカ、先生のお力によつて癒して戴き度うございます、恐れいりますが、宅までおいでを願ひます」

氣の毒なほどに心配と看護に疲れた顏に熱心こめてお願ひいたしました。

エス樣はヤイロの心をお酌みなされて、あはれに思召し

「よろしい、往きませう、お氣の毒なことだ」

とお出かけになりました。ヤイロはどんなに嬉しかつたか知れません、先に立つて御案内いたします、大勢の群衆はゾロ〳〵ついて來ます。

こころがその途中、家の者が息を切らして飛んで來した、ヤイロは

「オイ、病人は如何だ、花子は如何だ……」

「はい、何ともお氣の毒で御坐います。お孃樣はタッタ今、お死去になりました」

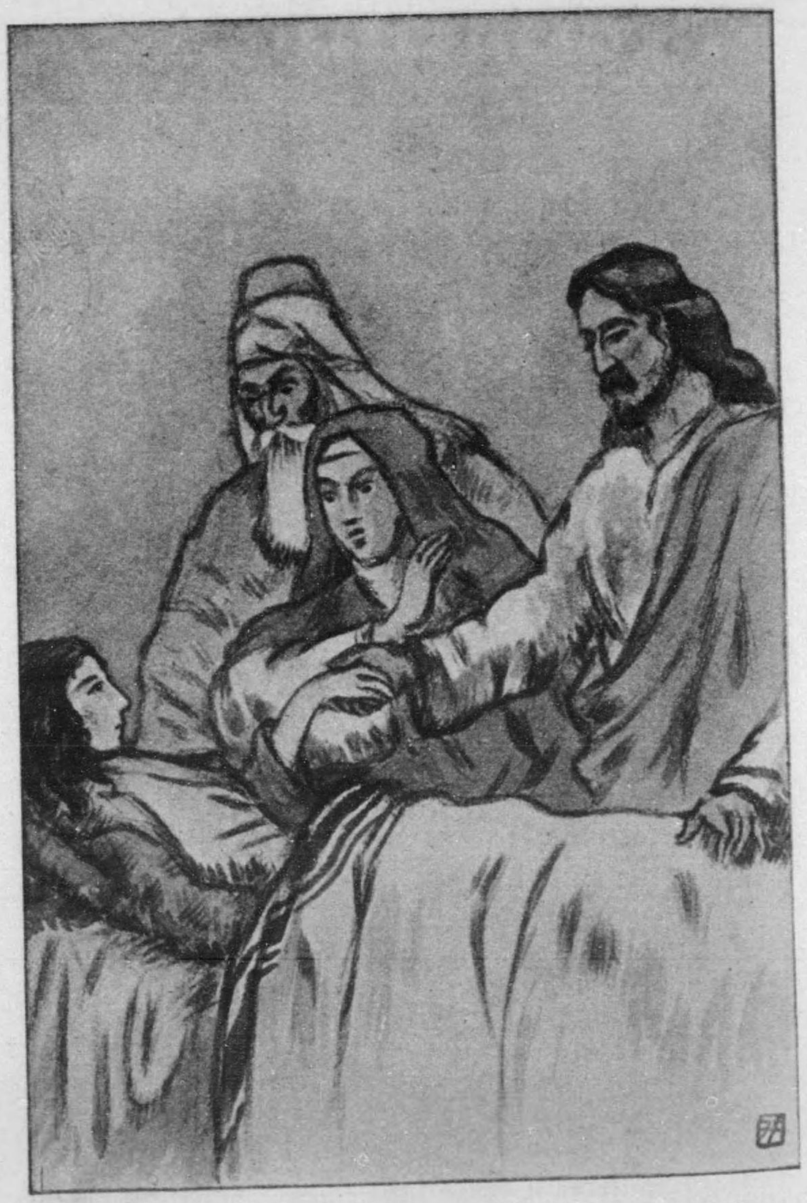
これを聞いたヤイロは蒼青になり

「ヤッ、もう遲いか、あッ殘念なことした」

拳を握つて涙をハラ〳〵こぼしました。使者は

「ハイ、旦那さま、エス樣にお出でを願ひましても無駄で御坐います……」

エス樣は、これをご覽になつて



「これ〳〵、さう心配するには及びません、私にお頼りなさい、大丈夫だ……」

そしてヤイロの家までも往つて下さいました。家の前は一ぱいの人で、やつとの事なかにはいりますと、誰もかもオイ〳〵と泣いてゐます、ヤイロも悲しくなつてワッと泣きだしました。

エス様は

「これ〳〵、なにを泣くんです、お嬢さんは死んだのでなく眠つだのです」

これを聞いて、なァんだエス様は人を馬鹿にしてゐる、眠つてるもないもんだ、と悪口いふ者もありました。

エス様はそんなことは耳にもおとめにならず、病人をおいた房にゆき、やつれに窶れて冷たくなつてゐる死人のそばにより、その手を把つて

「娘さん、起るんですよ、お起きなさい」

とお呼びになると、まア不思議！床から起きだして歩きました、本人は夢から醒めたやうな顔をしてゐます、親達は勿論のこと、人々も殘らず悲みが變つて喜びとなり、お芽出度い〳〵と嬉しがりました。

エス様は娘に何か輕い物を食べさせる樣に仰せられて、此家をお去りになりましたが、このお孃さんは間もなく以前通りに、薔薇の花

のやうな林檎のやうな、色つやのよい娘になりました。

この人達はどんなにエス樣を難有く思つたでせう、このお孃さんを見る人達は、その度にエス樣のお力に驚いた事でせう。

ふしぎなお辨當

「お母さま、往つて參ります」

「あゝ氣をつけておいでよ、迷兒にならない樣にね」

「ええ」

「太郎や、お辨當持つたかい、忘れない樣におしよ」

「持ちました」

こゝはユダヤの北、ガリラヤの湖水に沿うたベテサイダの町、エス樣がその近所の野原でお話をなさるといふので、一人の少年も聽に

ゆかうといふこころです。

本當の名があるでせうけれども解りませんから、まづ太郎としてお

きます。

お母さまにこさへて戴いたお辨當をもつて、いそ〳〵家をでた太郎

は、大勢ゾロ〳〵でかける群衆の中に交りました。

近所の、をぢさんや、をばさん方も參ります。

「ほオ、太郎さんか、君もおいでか、お母さんは」

「え、お母さまも往きたがつてゐますけれども、今日は誰もお留

守居がないもんで……」

「さう、それは惜しいね」

「……」

町を離れ廣い野原になりました、お話のある場所はまだ〳〵向うで

す。澤山の人々はゾロ〳〵長くつゞいて、あつちからも、こつちか

らも出てきます、太郎の胸はエス樣のお話を聽きたいので躍つてゐ

ます。

漸く小高い山のそばに着きました、群衆はその周圍に集りました、

あちこちから〳〵來る人達も、そこに集りました。

太郎はドンナに驚いたかわかりません、これまで何があつても斯ん

なに人の集つたことはありませんでした、それといふのはベテサイ

ダばかりでなく、四方から人が寄つたのですから、小さい太郎の眼

はどんなに輝いたかわかりません。

やがてエス様はお弟子をつれて、山の上にお立ちになりました、ざわめいた群衆はシンと靜まつてお話のはじまるのを待ちました。

間もなくお話がはじまりました。それが太郎にもよく解ります、到つてやさしいお言葉です。太郎はます〳〵驚きました。これまで偉い人といふ者は何でも六づかしい言葉を使うものだと思つてゐたので、エス様もたぶん、太郎に解らないお言葉をおつかひなさるだろうと思つてゐたのです。

エス様は何時でも、學問のある人や大人にばかりでなく、誰にでも解るやうにお話しなさいました、ですから誰もかも時刻のたつのを

忘れるほど喜んで伺ひました。

此日もだん〳〵暮れかゝりました、けれども人々は歸ろうどしません、モット〳〵お話して下さいとせがみますから、エス様も次々とお話しなさいました。

その中に、日は次第に西の山に沈んで薄暗くなりました、お弟子たちは心配し

「先生、どうしませう、こんなに晩くなつて了ひました、群衆はお腹を減してゐるでせう、家も遠いし困るでせう」

エス様は

「さうだね、食事をやつたらよかろう」

「だつて、此だけの人にドウしませう、六七十圓ほどのパンが要ります、それでも少しづゝしかやられません」

「……」

「それにこゝは野原ですから、おいそれと間に合ひません、パン屋だつて今すぐ出來ますまい、ヤレ〳〵」

太郎はこれを聽いておりました、そしてナル程お弟子の言ふ通りだ、ではドウしたものだろう、と考へながら見てゐます。

するとエス樣は

「誰かパンを持つてゐる者はないか」

と仰しやいました、太郎は思はず

「ハイ、僕は持つてゐます」

と言ひました、お弟子の一人は

「幾個持つてるの、……なに五つだつて、それんばかりでは仕樣がないね、千も二千もあるならまだいゝが」

エス樣はそれをお聽きなされて

「おゝ、パンが五つか結構だ、なにお魚もある、それは上等だ、それを皆、私におよこしな」

太郎はビックリしました、エス樣は僕のお辨當をこりあげた、そしてどうなさるだろう、御自分ひとりで召上るおつもりか、まさかそんな意地の悪いことは遊ばさないだろう、なんだか心細くなりました。

「これ太郎、お前のを貰つたよ、しかし心配するんでないよ」
まアどうして太郎の名までもご存じでせう、エス様は人の名前ごころか、心の中までも瞭然ご存じでゐらつしやいます。
エス様はお弟子達に、これだけあれば澤山だ、買ひに往くにも及ばないと言つておられます。
「さ、これから皆に食べさせるから、草の上に坐るんだ、さ、さ」
弟子達は何のことか解りません、太郎は勿論のことです、けれどもエス様の仰しやるまゝに
「さァ〳〵、皆さんお坐りなさい、早く〳〵」
エス様は太郎のパンとお魚をお手にして

「今、皆さんにパンとお魚を差上げますから、待つて下さい、まづ天の神様に感謝を申上げませう」
と仰せになり、夕食のお祈りをなさいました、そしてパンをお裂きになると幾つにも〳〵殖ゑ、裂けば裂くほど殖えました、エス様は
「さ、みんなにお配げなさい」
と仰せられながら、ドシ〳〵お裂きになりますと、そばから〳〵パンが山のやうになります、お弟子は目の廻るほど忙しく配りました、何しろ男だけでも五千人といふ大人數に、たつた五つのパンが食べきれないで大滿足、その殘餘をあつめましたら十二の籠に一ぱいありました。

太郎が、若し惜しがつてお辨當をエス樣にあげなかつたら、こんな幸なことにならなかつたでせう、エス樣の仰せに從つて差上げた五つのパンと二つのお魚が、何千人といふ人を喜ばせることが出來ました。

お辨當をささへて下さつた太郎のお母さまも、此事をお聽きになつて、ドシナに嬉しく思つたことでせう。

夕食の後

お說教と御馳走とで心もお腹も一杯になり、人々は大よろこびで家に歸りました、湖水の彼岸の空は夕映の色に染められてゐます、人影の尠くなると共に日が暮れて、四邊は靜になつて了ひました。

その時、エス樣は弟子達に

「お前達も一足さきにお歸りなさい」

「先生もお歸りになるんでせう」

「否、私は後からゆく……」

「えッ、後からですッて、ではお待ち申します」

「いや、それには及ばない、そして舟で歸るがよかろう！」

無理に弟子達を歸して、御自分ひとりお殘りになりました、美しい明星は淋しさうに光つてゐます。

エス樣は、また山にお登り遊ばして、天の神樣にお祈禱をなさいました、なにしろ毎日〳〵お忙しいので思ふ存分、お父樣である神樣と親しくお話する時機が少ないので、わざ〳〵獨りお殘りなされたのです。

さて、船はだん〳〵と沖へ漕ぎ出ましたが、夜半になつて、惡い風が吹いてまゐりました、舟は木の葉のやうに搖られ、進まうとして

も仲々に進みません。

「さァこれは大變だ、どうにかしなくちやならない」

「どうすれば良いんだ……」

「それや、僕にもわからない、グッ〳〵してゐると覆かへつて了ふぜ」

弟子たちは一生懸命、汗を流して漕ぎますが、こても叶ひません、やがて夜明ちかくになりましたが、それでも暴風がやみません。

その時、薄暗いのでよくは見えませんが、後の方から追つかけて來る者があります。弟子達は驚き、目を見張つて覗きましたが、何やら海の上を歩いて此方に來る樣子、いつの間にか弟子たちの顏は靑

くなつてゐます。

「おや、何物だろう、……これ君ごうしたんだ、蒼青な顔してゐるぜ」

「へッ、君の顔の方が青いぜ」

「それは、さうと彼は何んだろう」

「はあ、胡摩化してゐら、……なんでもいゝから逃げだそう」

一同は力を込めて漕ぎますけれど、少しも進みません。

「これは困つた……」

「オイ、君だん〳〵やつて來たぜ」

「あれや、お變化だね、……」

「でもエス様はお變化だの、幽靈だのといふものは無いつて仰しやつたぜ」

「フム……」

その中に、そのお變化が

「オイ、オイ」

と呼びかけました、此方の弟子たちは冷汗を流して慄ひてゐます。

またもお變化は

「待つた〳〵、待つて頂戴」

弟子達は返事をする勇氣もありません

「……」

「私だよ、怖がるんぢやない、私だよ……」

「なァんだ、先生だよ、先生だ」

「なに、先生だ？」

「先生ですか」

「おゝ、さうだ私だ、私だ」

けれども、まだ疑つてゐます、そしてペテロは

「若し先生に違ひないならば、私が歩いて往きます、宜う御坐いますか」

「あゝ宜々とも〳〵」

氣の早いペテロは裾を捲つて海に飛込みますと、ナル程浮きまして

涙の上が歩けます、驚くやら嬉しいやら夢中になつてズン〳〵進みましたが、何しろ荒れ狂うてゐる海です、恐ろしい涙を見ては、さすがに怖くなりました。

こゝまで來たはよいが、若し沈んだなら、ドウしやうと思ひましたら、モーたまらなくなつたのです、すると遽かに體が重たくなつて、ヅブ〳〵沈みかゝりました。

「ひやァ、大變だ、先生たすけて下さい、助けて……」

ペテロは大聲あげて叫びました。

するとエス樣はお笑ひになり、ペテロの手をおさへ

「なぜ涙を見て怖がるのだ、私が大丈夫だと言つてあげたのに、疑

「ふから沈むのだ」

と仰せになりました、それから連れだつて舟の中へおはいりになる、暴風はケロリとやむで了ひました、弟子達は今さらの樣にエス樣の難有いこと、神の御子でゐらつしやることが解りました。

人違か本人か

「ドーゾお旦那さまや御新造さま……この生來の瞽をお助け下さい」

といひながらエルサレムの神殿の入口で物貰ひをしてゐる四十恰好の乞食がありました。ある日のことエス樣はお弟子をおつれになつて、ゾロ〳〵そこをお通りになりました、乞食を見た弟子達は

「やァ、あれは生れるときからの盲だつてサ」

「フム……かあいさうだな」

「どういふもんだろう、あれは親の罰があたつたのか、それとも本人が悪いことしたのか、……イヤ生れない先に悪いことする者もない」

「何をいつてるんだ、君は」

「ハテ、解らなくなつて了つた」

「何が」

「ねえ、先生どういふ譯のもので御坐いませう」

エス様はこれをお聽きあそばして

「これ〳〵、そんなに議論をするんぢや無い、これはその人の罪でもなく、また兩親の悪いためでもない、この人によりて神様のお

力があらはれる爲だ」

「へえー」

「あの醫を呼んでおいで」

「あの乞食を呼ぶんで御坐いますか、……オイ、お前さん一寸おいで」

お弟子に呼ばれた乞食は、何か貰へるものと思ひまして

「へえ、これはドーモ難有う存じます……」

と言ひながら、手をひかれてエス様のおそばへ參りました。

エス様は

「ドーだ、目明になり度くないか」

人違か本人か

「へえ、そりや癒るものなら……百圓のお金をいたゞくよりも愈し
で御坐います」
「さうか、それでは癒して上げやう」
と仰せられ、唾をペッと土の上に遊ばし、それを瞽の眼ぶたにつけ
ました、瞽は
「先生いまおつけになつたものは、何で御坐います」
「うむ、これは泥だ」
「御戯談ぢやありません、そんなものをつけて」
「イヤ、これで宜しい、これからシロアムの池へ往つて洗つて御
覽、すぐ癒るから」

瞽は妙なことゝ思ひましたが、エス様のお言葉通りにいたしました
ら、見事に癒つてしまひました。
ですから嬉しくつてたまりません、シャン〳〵歩いて歸ります、近
所の人達は驚いて
「オヤ、此人はCぢやないか……ドーしてまア目が開いたのか
……」
「いえ、これは人違ひでせう、ドーして瞽の目があきませう」
「さうですね、似た人もあるものだ」
すると乞食は
「ハイ、私はCです」

人違か、本人か

「なにCだ？……」

Cは、これ〳〵の譯で目開きになつたと話しましたところ、人々はCをパリサイといふ宗派の役所へつれてゆきました。

そこでもCは、エス樣といふ偉い方が、私の目に泥をぬり、シロアムの池へ往つて洗へと仰しやつた、疑はないで其通りにしたら、これこの通り眼が見える樣になりましたと淀みなく語りました、けれども、あんまり不思議ですから、これは人違ひかも知れないといふので、その兩親を呼びにやりました。

「これはお前達の息子に相違ないか、ドーして目あきになつたか、正直に申せ」

兩親はCを見て驚きました、そしてどんなに嬉しかつたか解りません、けれどもパリサイの人々がエス樣のお偉いのを憎んでゐるのを知つてゐますから、臆病にも

「ハイ、私共の息子に相違ありませんが、ドーして癒つたか存じません、本人にお聽き下さいませ、モー大人で御坐いますから、何でもお答が出來ませう」

と申しました、けれどもCは嬉しくつてたまりませんから、飽くまでもエスといふ難有い方がおなほし下さつた、私はあの方が善人だか、悪人だか存じませんが、私の目をあけて下さつたのは確です、あなた方もあの方のお弟子になつたらよいでせうと怯ず臆せず言ひ

ましたら、パリサイの人々は

「此奴！言はしておけばいろんな事をいふ、乞食の癖に、追ひだして了へ」

「貴樣みたいな奴に用はない、さァ出てゆけ」

と追ひだしました。

エス樣はこの事をお聽きになつて、わざ〳〵Cを尋ねに來て下さいました、そしていろ〳〵お慰め下さいました。

山の上、山の下

銀の兜を伏せたやうに、純白な雪を被つてガリラヤの北に聳ゆるヘルモン山といふのがあります、その近所にカイザリヤピリピといふ町があります、ある時、エス樣はお弟子たちを伴れて、そこへお出でになりました。

その時、弟子達に向つて

「一體世の中の人は私のことを何と思つてゐるね」

とお尋ねになりました、弟子たちは思ひ〳〵に

「先生、あなたのことを洗禮のヨハネの活き返つたのだなんて言つてるのを聞きました」

「私は先生のことを、エリヤがまた降つたのだと言ふのをきくました」

「或者はエレミヤのやうな預言者だといひます」

エス様はまた

「それでは宜しい、お前達は私のことを何と思ふか、言ふて御覽」

逸早くペテロは

「それや誰が何んといつても、あなたは救主です、神様のお子です」

と申しあげました、するとエス様は

「ソーだ、そこが大事だ、私はそれに違ひない、それを知らなければ天國に往くことは出來ないのだ、たゞ私を偉い人だ立派な人だと思ふだけでは足りない、救主と思つて賴らなければ不可ない」

と仰せになりました。そして此時はじめて御自分が、この後エルサレムに往つて、人々に苦しめられ、十字架につけられなければならないことをお話しなさいました。

ペテロは目を丸くし

「先生、それは不可ません、あなたは救主ぢやありませんか、救主が殺されてはドウなりますか、折角の御事業が駄目になつて了ひます」

「否、そうでない、世の中の人を救ふために、皆の罪を背負つて死ぬのだ、けれども三日目に活きかへる……」

「でも、それは不可ません、見こもないぢやありませんか、十字架なぞ」

「いえ、お前の考が違つてゐる、お前は神様のことを思はないで人前のことばかり思つてゐるのだ、他人のために死ぬほど立派なことは無い、そして私ばかりでなく、私を信ずる者は誰でもこの心懸がなければならない。

人間の靈魂は全世界のものよりも貴いのだ、それほど大事なものを救つていたゞく爲に、少し計りの辛いことは我慢しなければな

らない。

さア、一同も十字架にかゝるつもりでゐるのだ、それが厭な人は、自分の靈魂を亡くして了ふのです」

とお教えになりました。

それから一週間ばかり旅行して、ヘルモン山の峯續きの高い山に着きました、そこでエス様はヨハネ、ヤコブの兄弟二人とペテロとをお伴れになり、四人でその山にお登りになりました。

あとの九人は麓の邑に殘つてゐます。

山の上は登るほど見晴しがよくなつて、時は丁度春でしたから、紅や白の草花も咲いてゐます、黄色い菜種の樣な花も咲いておりまし

た、近くはヘルモン山の頂上やレバノンの山脈が見え、遠くはガリラヤの湖水もカペナウムの邑も綺麗に見えてゐます。

頓て、上に登つて一休みいたしますと、エス樣のお姿が遽かに變つて了ひました、まア不思議、驚いて見上げると、御顏は太陽のやうに輝き、お着衣は純白に光つてゐます。

三人は呆氣にとられて見てゐますと、また〳〵不思議、往昔の偉い人だつたモーセが出てきてお辭儀をします、するとまた片方から昔の預言者エリヤが見えてエス樣ををがみました。

そして三人のお話がようく聽えましたが、それはカイザリヤで弟子たちにお話なされたと同じ樣なこと、エス樣が世界の人の身代りに

十字架にお懸りになるお話です。

ヨハネ、ヤコブにペテロの三人は、かねて話にきいた昔の偉い人達こいつまでも、一しよにゐたいと思ひましたから、ペテロは大聲をあげて

「先生、この山に家を建て、皆樣ここ一しよに居たう御坐います、宜しう御坐いますか」

と申しあげましたが、言ひも終らぬに、綺麗な雲がモー〳〵と湧いて來て、四邊を包んでしまひました、弟子たちは、ドウなることかと思つて、地べたに嚙りつくやうにしてゐますと、神々しいお聲が天から響いて